



Title	ラヴリズムの形成 : 綱領<前進!>成立小史
Author(s)	鳥山, 成人; Toriyama, Shigeto
Description	「聖ペテルブルクとモスクワの青年たちを創造したのはラヴロフではなく、また行動の時期を彼らに告げたのもラヴロフではなく、反対にラヴロフを創ったのがこの青年たちであった. . . . . 彼が彼らに対してではなく、彼らが彼に対して<前進!>と叫んだのである。」(〈司法大臣パーレン伯の覚書. ロシアにおける革命宣伝の成功〉, 第二版, への3. ラリの後書より)「ラヴロフは、疑もなく優れた思想家で非常に博識ではあったが、革命思想という彼にとって新しい分野では独自性を発揮することができず、革命的文書へのその参加の全時期を通じて青年たちを指導するよりはむしろ青年たちに追随した。」(スタリク<70年代の運動より>)
Citation	スラヴ研究, 4, 19-63
Issue Date	1960
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4947">https://hdl.handle.net/2115/4947</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113145.pdf



# ラヴリズムの形成

— 綱領〈前進！〉成立小史 —

鳥 山 成 人

「聖ペテルブルクとモスクワの青年たちを創造したのはラヴロフではなく、また行動の時期を彼らに告げたのもラヴロフではなく、反対にラヴロフを創ったのがこの青年たちであった。……彼が彼らに対してではなく、彼らが彼に対して〈前進！〉と叫んだのである。」（〈司法大臣パーレン伯の覚書。ロシアにおける革命宣伝の成功〉、第二版、への3. ラリの後書<sup>1)</sup>より）

「ラヴロフは、疑もなく優れた思想家で非常に博識ではあったが、革命思想という彼にとって新しい分野では独自性を発揮することができず、革命的文書へのその参加の全時期を通じて青年たちを指導するよりはむしろ青年たちに追従した。」（スタリク〈70年代の運動より〉<sup>2)</sup>）

序

1. 第一次綱領草案
  2. 亡命前後のラヴロフ
  3. パリ・コンミュン期のラヴロフ
  4. 革命家ラヴロフの生誕
  5. 第二次綱領草案とチューリッヒにおけるラヴロフ
  6. 第三次（最終）綱領
  7. 綱領の反響
- 付 — 綱領〈前進！〉邦訳 —

序

ピョートル・ラヴノヴィチ・ラヴロフ Петр Лавнович Лавров (1823-1900) の革命思想は、バクーニンのそれと並んで、ナロードニキの革命運動に特にその前期において大きな影響を与え、いわゆるバクーニズム Бакунизм に対してラヴリズム Лавризм と呼ばれたが、このラヴリズムが初めて体系的に展開されたのは1873年のことであった。すなわちこの年の夏彼はスイスのチューリッヒでロシアの革命運動の機関誌として〈前進 Вперед〉を創刊し、この創刊号に、自ら執筆した綱領〈前進！〉を發表して、自己の革命運動理論を初めて具体的に展開した。

1873年はあたかも〈人民の中へ В народ〉の運動が起った年であり、この綱領をのせた〈前進〉第1号の發刊は、同じ年のバクーニンの〈国家と無政府 Государственность и анархия〉の出版とともに、〈人民の中へ〉の運動の歴史の上で重要な意義を有していた。またこの綱領の發表は、バクーニンが明かにこれに対する反駁を意図して〈国家と

1) Записка министра юстиции графа Палена. Успехи революционной пропаганды в России, изд. 2-ое, Женева, 1875, стр. 20

2) Старик, Движение семидесятых годов по Большому процессу (193-х), «Былое», 1906, X, стр. 13-14. —「スタリク（老人）」はこの裁判の主要関係者の一人の変名。

無政府>の綱領的付録<sup>1)</sup>を書いたことと相まって、70年代のナロードニキ思想の歴史の上で重要なラヴリズムとバクーニズムの理論的対立を決定的なものにした。70年代に合法ジャーナリズムでは<知能か感覚か Ум или чувство ?>の論争がはなばなしく展開されたが、この<知能か感覚か ?>は<宣伝か煽動か ?>すなわち<ラヴリズムかバクーニズムか ?>を意味した<sup>2)</sup>。

このように、ラヴリズムの最初の明確な表現たる綱領<前進 !>はナロードニキの革命思想と革命運動史の上で特に重要なものである。したがって従来のナロードニキ主義の概説書は勿論、一般のロシア革命運動史および思想史の多くも、この綱領の内容を多少とも詳しく紹介しており、そのなかにはさらに、綱領発表当時のその反響や影響にふれているものもある<sup>3)</sup>。ただラヴロフによるこの綱領の執筆と発表の経緯、それからこれと密接な関連のある社会主義と革命運動へのラヴロフの接近の過程すなわち革命家ラヴロフの生誕の事情は Богучарский と Venturi が簡単にふれている<sup>4)</sup> 以外は、これらの概説書ではほとんど取上げられていない。しかし綱領の内容の正しい理解と評価のためにはこれらの点を明かにすることがかなり重要なことのように思われる。

これらの点を多少とも詳細に扱っているのはモノグラフで、そのうち管見の範囲内で特に重要なのは、П. Витязев, П. Л. Лавров в 1870-73 гг. <sup>5)</sup>; И. С. Книжник-Ветров, П. Л. Лавров от первых публицистических выступлений до издания <Вперед> (1857—март 1872) <sup>6)</sup>; J. M. Meijer, Lavrov in Zürich <sup>7)</sup> の3つである。<sup>8)</sup> Витязев は

1) この綱領的付録については第七節で論及する。

2) См. Иванов-Разумник, История русской общественной мысли, т. II (Русская литература от семидесятых годов до наших дней), 6-ое изд., Берлин, 1923, стр. 16

3) А. Тун, История революционного движения в России (Перевод с <Alphonse Thun, Geschichte der revolutionären Bewegung in Russland, Leipzig, 1883>), 1904, стр. 87-89. ナロードニキ史の最初の概説書たる本書には何種類かの露訳があるが、ここにあげた1904年版は原文を大幅に修正補足している。本編で本書をこの露訳版であげるのは Л. Э. Шишков による修正補足の部分を指示する場合である。

Ludwig Kulczycki, Geschichte der russischen Revolution (Übersetz. aus <L. Kulczycki, Rewolucja Rosyjska, Lwów, 1909>) 3 Bde., Gotha, 1910, II, S. 114-16, 128-9

В. Я. Богучарский, Активное народничество семидесятых годов, Москва, 1912, стр. 110-116

Thomas G. Masaryk, The Spirit of Russia (Transl. from <T. G. Masaryk, Zur russischen Geschichts- und Religionsphilosophie. Soziologische Skizzen, 2 Bde., Jena, 1913>), 2nd ed., 1955, II, pp. 89-92

J.-W. Bienstock, Histoire du mouvement révolutionnaire en Russie, I, Paris, 1920, pp. 138-39

Franco Venturi, Il populismo russo, Torino 1952, II, pp. 747-49

С. Г. Пушкирев, Россия в XIX веке (1801-1914), Нью-Йорк, 1956, стр. 267

Ш. М. Левин, Общественное движение в России в 60-70-е годы XIX века, Москва, 1958, стр. 260-61

4) См. Богучарский, Указ. соч., стр. 108-110; Venturi, op. cit., II pp. 744-46

5) これは Материалы для биографии П. Л. Лаврова. под ред. П. Витязева, вып. I, Петроград, 1921 に付載された論文である。

6) これは П. Л. Лавров, Избранные сочинения на социально-политические темы в 8 томах, I, Москва, 1934 に編集者 Книжник-Ветров が <Введение к I тому> としてのせたものである。なおこの「選集」の刊行は1935年に政治的事情で1857-76年の著作を収めた第4巻までで中絶した。

7) これは J. M. Meijer, Knowledge and Revolution. The Russian colony in Zürich (1870-1873), Assen, 1955 の第4章をなしている。なお、この本の表題は、著者はことわっていないが、恐らく <前進> 1号のラヴロフの同名の論文 <Знание и революция> からとられたものである。

8) この他、Б. П. Козьмин, От девятнадцатого февраля к первому марта, Москва, 1933 も стр. 112 以下でラヴロフの政治的立場の推移をかなり詳しくあとづけている模様であるが (См. Б. П. Козьмин, Русская секция первого интернационала, Москва, 1957 стр. 392, прим. 28), 閲読の機会をもたなかった。以下本編で Козьмин, Указ. соч. として指示するのは <Русская секция……> の方である。

革命家ラヴロフの生誕を当時のラヴロフの書翰などによって明かにし、 Книжник-Ветров は綱領執筆直前までのラヴロフの思想と活動を豊富な史料によって論じ、Meijer は綱領〈前進！〉の成立事情をかなり詳しく述べている。しかしこの3者はその取扱っている時期と記述の重点が少しずつずれているばかりでなく、史料の解釈や立論の方法、さらに結論においてもかなりの相違がある。特に Витязев と Книжник-Ветров は綱領執筆前におけるラヴロフの政治的立場の評価において鋭く対立している。前者が、ラヴロフ自身のいう処を重んじて、亡命前と、亡命後も〈前進〉発刊までのラヴロフの思想と活動の穏健性を力説するのに対して、後者は、ラヴロフの証言には事実と相違する点が多いとして、その思想の革命性を彼の文筆活動の最初から実証しようとしている。この点についての Meijer の評価は大まかにいて両者の中間に位するが、どちらかといえば Витязев に近いように思われる。本編の筆者も、この点については Meijer とほぼ同様の理解をもっているが、約1年間の綱領執筆過程におけるラヴロフの思想の推移に十分な考慮を払っていないように思われる点で、Meijer に対しても批判をもっている。ラヴロフの思想の発展を軽視し、これを固定的にとらえる傾きがある点は、Витязев と Книжник-Ветров も同様である。そこで、主にこの3者の業績に特に史料の面で多くを負いながらも、亡命の前後から〈前進〉創刊のころまでのラヴロフの政治的立場の推移を筆者なりにあとづけ、この間におけるラヴリズムの形成を綱領〈前進！〉の執筆過程と関連させて考察しようというのが、筆者が本編の執筆を思い立った理由である。本編が、本編の付録としてその邦訳をのせる綱領そのものの内容の理解に多少とも役立てば幸いである。<sup>1)</sup>

—

〈前進〉創刊号に掲載された綱領の完全な表題は、〈前進！—われわれの綱領（1872年3月—1873年3月）Вперед!—Наша программа（Март 1872—Март 1873）〉<sup>2)</sup> となっているが、ここに（1872年3月—1873年3月）とあるのは、ラヴロフが1872年3月に機関誌創刊の提案を受けてそのために最初の綱領草案を書いてから、以後2回これを書直して1年後の1873年3月に最終的な綱領が完成したという事情によっている。

ラヴロフは機関誌創刊の提案を、当時パリにいた彼のところに本国から派遣されて来た数人の使者から受けとったのであるが、当時彼は、彼自身のいうところによれば、「革命的出版物の綱領を作成してこの出版物を指導するという提案をもってロシアから

1) 本編における第1次史料（ラヴロフ始め関係者の著作・回想記・書翰の類）の引用には、関係文献からのいわゆる孫引が多いが、その場合引用に当たって当該文献の当該箇所を指示することは、煩を避けるため、原則として省略した。関係史料中重要なものは Venturi, op. cit., II, pp. 726-27, 746 の註にあげられている。

2) この綱領は〈前進〉Iに発表された後、За сто лет (1800-1896). Сборник по истории политических и общественных движений в России. Составил Вл. Бурцев, Лондон, 1897, 次いで Историко-революционная фрестоматия, I, Москва, 1923 に抜萃がのせられたが、完全な形では Лавров, Избр. соч., II, 1934, стр. 23-41 に収められたのが唯一のものであり、本編付載の邦訳もこれを台本とする。

使者が現われるという予想外のことに全く準備ができていなかった。」<sup>1)</sup>しかし彼は——後に彼がある私信の中で述べているところによれば——次のような理由でこの予想外の提案を引受けた。

私がそのためにだけ役立ち得る国から人々がやって来て、私に、私どもはあなたに、そしてあなたにだけ期待をかけている、と述べた時、私は——事業全体に対して極めて非観的であり、私と堅く癒着した私生活を当時もっており、私の覚悟が多くの葛藤、この生活における混乱と物質上の混乱をもたらすであろうことを知ってはいたが——拒否する権利をもたなかった。私は進むべきであると感じ、動揺することなく進んだ。」<sup>2)</sup>

ところで、このようにしてロシアからの使者たちの要請を受入れながら、当時ラヴロフは——Богучарский がいぶかっているように誠に奇妙なことであるが<sup>3)</sup>——この要請が本国の誰の、またはどの団体のイニシアティブによるものかを使者たちに確めなかったらしい。「現在に至るまで私には、——と20年後に彼は書いている——国外の機関誌の綱領を書いてそれを創刊することを私に提案するという考えが、ロシアの正にどこで起ったのかは、完全には明かでない。」<sup>4)</sup> もっとも彼はこの言葉にすぐ続けて、「しかしいくつかの噂によると、イニシアティブは数人の個人的な文筆上の友人と<歴史書翰>の読者のもの(<書翰>の成功を私は、しかし、この頃には全く知らなかった)、要するに、数の上で少く事業の本格的な組織の覚悟など全くもっていなかったグループのもの、であった。」<sup>5)</sup> といっており、そしてこの噂が現在ではほぼ真実を伝えたものとされている。<sup>6)</sup> しかし当時においてはラヴロフは、こうした噂は勿論のこと、この噂のもとになった本国における<歴史書翰>の評判も全く耳にしていなかったもので、自分にこのような機関誌編集の話が持込まれたことを意外とし、この新たな企てのイニシアティブについても全く誤った推測を下したのであった。

「私は、後に誤りであることわかった推測的理論をたてた。私にとってこのイニシアティブは、私が識っており、そして彼らが私に対して非友好的でなかったときに私とその精力を評価した急進的文筆家のグループにしか属しようがなかった。1872年3月Chaussée d'Antinの私の部屋で綱領<前進!>を書くに当って私は、事態を次のように考えた。反動の強化によって急進的文筆家の代表者たちは、合法的文書を地盤とする闘争は現在ではすでに不十分である、と確信せしめられた。彼らは私がロシアを去った後の2年間に、恐らく、文筆と政治上の闘争のために組織された。しかし運動の現在の参加者たちは誰もロシアを捨てることができず乃至は欲していない。……彼らが私に目をつけるのは、私がすでに祖国に戻る途を自ら絶っているからであり、そして私は、現存秩序に対する反対において本質的

1) П. Л. Лавров, Народники-Пропагандисты. 1873.-1878 г. г., 2-е исправленное издание, Ленинград, 1925, стр. 51 (以下本書を Лавров, Народники と略記する。) ラヴロフのこの著作は初め Материалы для истории русского социально-революционного движения, X, издание "Группы старых народовольцев" (В двух выпусках), Женева, 1895-96 に発表された。これはこの後1907年単行本としてペテルブルクで出版されたが、これは政治的理由で削除された部分が多く、この削除された部分を復活したのが本編で利用する改訂版である。

2) Голос Минувшего, 1916 г., No. 9, стр. 135. この手紙に出て来る<私生活>とは後にのべる А. Н. Чаплицкая との生活のことである。

3) См. Богучарский, Указ. соч., стр. 109

4) Лавров, Народники, стр. 53

5) Там же, стр. 53-54

6) Cf. Meijer, op. cit., pp. 115, 97, n. 22

には彼らと意見が喰い違っておらないで、かつ、多分新しい機関誌を運営する能力のある文筆家としてだけみられている。」<sup>1)</sup>

かくしてラヴロフは、この誤った「推測的理論」に立って、すなわち「過去数年間ロシアで形成された」と彼の考えた「文学的=政治的反対派の増大しつつある力」を専ら念頭において<sup>2)</sup>、最初の綱領草案を書いたのであるが、この第1次の草案は、少くとも亡命者の間では、評判がよくなかった。例えば、H. П. オガリョフ宛の翌年1月2日付<sup>3)</sup>の手紙で H. В. ソコロフはチューリッヒから次のように伝えている。

「チューリッヒはどうか、という君のお尋ねだが、この質問には次のように答えよう。僕が到着した日以来われわれの間ではロシア人の青年たちのなかに分裂が生じた。その責任はいうまでもなく僕にはなく、雑誌創刊の目論をもってパリからチューリッヒにやって来たさる哲学者ラヴロフ氏にある。このラヴロフは雑誌の綱領を書き、しかもそれを、バクーニン、ザイツェフや僕や当地の優れた青年たちをむかつかせるような醜悪な精神で書いたのだ。それで僕たちはラヴロフとその徒党から分れ、離れることにした。考えてもみたまえ、ラヴロフの綱領では革命が悪とされて合法性が説かれているのだ。」

この手紙の書かれた1873年1月には、後述する如く、すでに第2次の綱領草案が書かれているのであるが、この手紙を引用している Богучарский はこれを第1次草案の不評の例としてあげており<sup>4)</sup>、Meijer もこの手紙を、当時石版刷で少数出ただけで現在は残っていないこの第1次草案の内容を示す史料の1つとして利用している。<sup>5)</sup>それで本編でも差当りこれにしたがったのである<sup>6)</sup>が、Meijer はこの手紙やその他の史料に基いて、第1次草案においてラヴロフは「合法活動の諸手段を考慮した。綱領は、真に進歩的な行政官は、あるいは検事すらもが、その日常の仕事によって人民の事業に奉仕することができる」と主張した。」と述べている。<sup>7)</sup> この合法活動についてラヴロフは最終綱領ではほとんど全面的に否定的態度をとるのであるが、第1次の綱領草案でこれが容認されているのは何よりも、Meijer もいう如く、彼が上述の「推測的理論」に立って新しい「国外機関誌に普遍的な社会主義的性格 *общесоциалистический характер* を与えよう」<sup>8)</sup>とし、「この精神で綱領を書いた」<sup>9)</sup>からであった。<sup>10)</sup> Meijer の説明はこの間の経緯についての晩年のラヴロフ自身の説明——というよりも弁明——によっているが、Богучарский も、後に修正を要するような綱領をラヴロフが書いたのは、彼が誤った「推測的理論」に立っていたからであると考えており。<sup>11)</sup> このこと自身にはあまり問題はない。

1) Лавров, Народники, стр. 51-52

2) Там же, стр. 52

3) 本編の舞台は主に西欧なので、日付はすべてグレゴリー暦による。

4) Богучарский, Указ. соч., стр. 109-10

5) Meijer, op. cit., p. 193, n. 24

6) ただしこの点はなお検討を要するようと思われる。

7) Meijer, op. cit., p. 116

8) Лавров, Народники, стр. 52

9) Meijer, op. cit., p. 116

10) ただし、ラヴロフがこの綱領執筆に際して念頭においていた急進的文筆家の1人は、この綱領をあまりにあけすけであるとした。本国の急進的文筆家の間でもこの綱領は概して不評であったが、それはバクーニン派の亡命者の間におけるとは逆の理由によるものであったようである。cf, Meijer, Ibid.,

11) См. Богучарский, Указ. соч., стр. 110

問題は、この合法活動の積極的承認に端的に表明されている第1次綱領草案の特色が、直接にはラヴロフの「推測的理論」の誤りによるものでありながら、同時にこの時期におけるラヴロフの政治的立場そのものをもある程度反映していたのではないか、という点にある。これは、このような「推測的理論」を立てたこと自体が、当時のラヴロフの思想的傾向と全く無縁ではなかった、ということでもあるが、これを検討するためには、この時期にいたるまでのラヴロフの、社会主義と革命運動に対する接近の過程を少しく調べてみる必要がある。それからまた、この第1次綱領草案の成立の経緯と草案の内容について注目すべきは、第1に、ラヴロフが機関誌編集の申出を承諾するに当って示している一種の使命感——知識人の人民に対する責任・使命を説いた〈歴史書翰〉の著者にふさわしいそれ——と彼の受動的態度・他律的性格であり、第2に、第1次綱領の不評の有力な理由として、合法活動の承認ということの他に、「この第1次綱領が革命家から広汎な科学的準備を要求した」<sup>1)</sup>ことが考えられることである。この使命感と他律的性格、革命における準備の必要の重視はともに、合法主義の積極的承認の面とは違って、ラヴロフその人と彼の革命理論の特色として最後まで残るものであるが、この特色もまた、第1次綱領執筆当時までのラヴロフの政治的立場の推移をみることによって、その形成過程が明かになる。

## 二

ラヴロフは元来その人柄からいつて実践活動には不向な学者肌の人物であった。Masaryk は、「彼は生涯著述家であり学者であった」<sup>2)</sup>と評し、Yarmolinsky も、「彼は本質的に理論家で学者風であった」<sup>3)</sup>としている。Masaryk はまた、「彼には、指導者にとって極めて本質的な、急速な決断を下す能力が欠けており、彼の政治的發展は緩慢であった」<sup>4)</sup>と述べており、Venturi も、「ラヴロフは自らをゆっくり形成した」<sup>5)</sup>と述べているが、事実ラヴロフが社会主義者になったのは中年に入ってからのことである。

ラヴロフは1842年に砲兵学校を卒業して2年後に若くしてその数学教授となった。彼は自然科学・哲学にも興味を有し、すでに50年代末にそのヘーゲル哲学の研究で名を知られるようになった。他面彼は若い頃から社会問題・政治問題にも関心を示し、一時はチェルヌイシェフスキーや第1次〈土地と自由〉とも関係があった。<sup>6)</sup>しかし「その科学者としての経歴の初めには彼は自由主義と当時の社会主義の中間の立場をとって

1) Meijer, op. cit., p. 116

2) Masaryk, op. cit. II, p. 135

3) Avrahm Yarmolinsky, Road to Revolution. A century of russian radicalism, London, 1957, p. 184

4) Masaryk, op. cit., II, p. 134

5) Venturi, op. cit., II, p. 727

6) この関係については Книжник-Ветров, Указ. ст., «Лавров, Избр. соч.», I, стр. 28-34 をみよ。なお П. Л. Лавров в воспоминаниях современников. Из рассказы М. А. Антоновича, «Гол. мин.», 1915 г., No. 9, стр. 123 によれば、1861年頃「チェルヌイシェフスキーはラヴロフを、いくらかの見解の相違にもかかわらず、広義において自己の陣営の人物とみていた。」

いた。」<sup>1)</sup>したがって1866年のカラコゾフの皇帝暗殺未遂事件の後彼が危険人物の1人として逮捕された<sup>2)</sup>ときにも、当時の急進的青年層の間では、この逮捕は「自由主義者の迫害」とみなされて、「ほとんど注意を惹かなかつた。」と同時代人の M. П. サージンは伝えている。<sup>3)</sup> 実際「60年代の末までは、百科全書的な教養の持主たる大佐<sup>4)</sup>を、<若い世代>の現実の指導者どころか、指導者になるかも知れない者としてさえ考える気になる者は1人もいなかった。」<sup>5)</sup>のである。<sup>6)</sup> 彼が一般の注目を浴びようになるのは、この逮捕の翌年2月に始まる流刑生活の中で有名な<歴史書翰>を1868年から翌年にかけて<週 Неделя>誌上に発表して以後、特にそれが1870年単行本になって以後のことである。この<書翰>がナロードニキ運動史の上に有している意義については今さらいうまでもない。Bienstock のいうように、「チェルヌイシェフスキーの<なにをなすべきか?>を除いて、ロシアの革命運動に P. ラヴロフの<歴史書翰>ほどの影響を与えた書物は恐らくない。」<sup>7)</sup> これはこの<書翰>で「彼が、60年代末にロシアの青年達を次第にとらえ始めていた、なお不十分にしか説明されていなかった道徳的要求に、科学的に基礎づけられた理論的表現を与えた」<sup>8)</sup>からであった。<歴史書翰>が発表された当時のその反響について例えば H. C. ルサノフは次のように回想している。

「<歴史書翰>はじきに青年達の座右の書、福音書となり、70年代を通じてそうであつた。……かつてわれわれは、人間を<思考する現実主義者>にするための自然科学の大きな効能をわれわれに語ったピサレフに惹かれた。われわれは皆、自己の<危達した利己主義>の名において生活することを欲するような<思考する現実主義者>になる覚悟をした。……そして突然小さな書物がわれわれに、自然科学がすべてではないこと、蛙の解剖だけではとてもやっていけないこと、歴史があり、社会的進歩があり、最後に、飢えている人民、労働に苦しめられている人民、文明の全建築物を支えている勤労者がいて、彼等によってはじめてわれわれの蛙の研究、その他すべての科学の研究が許されていること、最後に人民に対する、勤労者の大軍に対するわれわれの未払いの負債があること、を語った。」<sup>9)</sup>

しかるにこの<書翰>の当の筆者たるラヴロフは当時なお完全な社会主義者ではなく、いわんや革命家ではなかつた。彼は<書翰>発表の翌1870年亡命するが、この「流

1) Kulezycki, a. a. O., II, S. 26

2) この逮捕は同年5月7日(露暦4月25日)のことである。なおこの逮捕と、これに続く取調べ、裁判(軍法会議によるもの)と判決の内容については、筆者未見の文献であるが、В. Н. Нецаев, Процессы П. Л. Лаврова 1866 г., «Сборник материалы и статей», 1921 が詳しい。

3) Гол. мин., 1915 г., No. 10, стр. 113

4) ラヴロフは上記の事件で逮捕されて官位を剝奪された当時、砲兵学校の教官として大佐に昇進していた。

5) Г. Плеханов, Соч., т. IX, стр. 6

6) 但し、これについては次のような Книжник-Ветров の指摘も、ある程度は考慮されなければならない。「ラヴロフはその逮捕まで多く無署名または変名で著作を発表したため、ラヴロフの本当の政治上の立場はあまり知られず、文筆家の間でこれを知るものはまれであった。」(Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 38) しかし Книжник-Ветров の次のような主張は明らかに行過である。「ラヴロフはその流刑前にすでに、チェルヌイシェフスキーが合法印刷物で、またバクーニンが国外で発展させた60年代の最も進歩的な革命思想の水準に完全に立っており、理論と実践の完全な一致を具現していた。」(Там же, стр. 45)

7) Bienstock, op. cit., p. 135

8) Тун, Указ. соч., стр. 122

9) Н. С. Русанов, П. Л. Лавров. Очерк его жизни и деятельности, «Былое», 1907 г., февраль, стр. 260-61

刑地からの逃亡と外国への出現の時期にラヴロフは、かなりの年配（彼はすでにほぼ50歳であった）と政治生活への継続的参加とにもかかわらず、政治的には既成の人物ではなかった。彼には人道主義的気分と民主主義的共感は本来的なものであったが、確固たる革命の見解は彼には欠けていた。」と Козьмин は述べている。<sup>1)</sup> またラヴロフ自身晩年に、その亡命の際彼が「ロシアから連れて脱出したのはむしろ、穏健でいくらかペダンティックな書齋の活動家の名声であった。」<sup>2)</sup> と回想している。事実ラヴロフはこの亡命と相前後して<祖国の記録>誌に発表した<ミハイロフスキー氏の進歩の公式><sup>3)</sup>において、前年に Н. К. Мухоморовский がその論文<進歩とは何ぞや？><sup>4)</sup>で展開した次のような進歩の公式——これはナロードニキ主義の進歩の公式と呼ぶにふさわしいものであった——を批判している。

「進歩とは不可分なるものの全一性への、人間諸器官の間のできるだけ完全に全面的な分業と人間の間での最低限の分業への、徐々の接近である。この運動をおさえるものはすべて不道徳で、不正で、有害で、不合理である。社会の多様性を少くし、それによって社会の個々の成員の多様性を増大させるものだけが道徳的で、正しく、合理的で、有益である。」<sup>5)</sup>

ラヴロフはこのミハイロフスキーの進歩の公式を批判して、<sup>7)</sup>「ミハイロフスキー氏の進歩の公式の諸要求を完全に満す社会は進歩的ならざる社会であろう。」<sup>8)</sup>としたのであるが、このミハイロフスキーに対するラヴロフの批判と関連して Kulczycki は次のようにいっている。

1) Б. П. Козьмин, Указ. соч., стр. 392

2) П. Л. Лавров, Три эпохи, «Материалы для истории русского социально-революционного движения». Приложение «С родины на родину», No. 3, Женева, 1893, стр. 155

3) Формула прогресса г. Михайловского, «Отечественные записки», 1870 г., No. 2. これは Лавров, Избр. соч., I, стр. 397-424 に収められている。

4) Н. К. Михайловский, Что такое прогресс? «Отечеств. записки», 1869 г., No. 2, 9, 11,

5) Сочинения Н. К. Михайловского, Спб., I, 1896, стр. 150

6) Мухоморовскийの社会理論については, Masaryk, op. cit., II, Chapter Fifteen, II; Kulczycki, a. a. O., II, Zweites Kapitel, III; Иванов-Разумник, Указ. соч., II, стр. 42-104; J. F. Hecker, Russian Sociology, N. Y., 1915, Part II, Chapter II; В. Евгеньев-Максимов, Очерки по истории социалистической журналистики в России XIX века, М.-Л., 1927, стр. 148-154; J. H. Billington, Mikhailovsky and Russian Populism, Oxford, 1958, Chapter III, IV; N. v. Bubnoff, Der Geist des volkstümlichen russischen Sozialismus, «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», B. 55, 1926, S. 382-87などを参照。なお本文に引用した文句はミハイロフスキーの進歩の公式として有名なもので、これらの著書・論文のいずれにも引用されている。

7) この批判の内容については, Kulczycki, a. a. O., II, S. 57-60をみよ。なお、本編では一切説明を省略したが、その社会理論を含むラヴロフの思想の大様とそれに対する評価・批判については, Тун, Указ. соч., стр. 122-28; Иванов-Разумник, Указ. соч., II, стр. 31-41; Masaryk, op. cit., II, Chapter Fifteen, I; Kulczycki, a. a. O., II, 2 Zeites Kapital, II; Hecker, op. cit., Part II, Chapter I; Г. Ладоха, Исторические и социологические воззрения П. Л. Лаврова, «Русская историческая литература в классовом освещении», I, Москва, 1927, стр. 351-422; Очерки по истории философской и общественно-политической мысли народов СССР, II, Москва, 1956, стр. 403-12などを参照。この他ラヴロフ自身がその思想体系をその短い自伝で要約している。この自伝は「Биография-исповедь」と題して1885年に筆執され、89年に補足されたものであるが、ラヴロフの生前には発表されず、彼の死後、「Вестник Европы», 1910 г., No. 10 и 11に「П. Л. Лавров о себе самом」という表題で発表された。П. Л. Лавров, Избр. соч. では元の表題で I, стр. 77-107に収められており、その後半(II. Учение)でその思想が要約されている。

8) Лавров, Избр. соч., I, стр. 404

「社会学においてミハイロフスキーの思想とぶれ合う思想を幾度も主張し、彼の思想を高く評価していたラヴロフが、それにもかかわらずミハイロフスキーの進歩の定義を却けてそれにきびしい批判さえ加えたことは、特徴的である。ラヴロフは学問を熱烈に愛しており、また永年学問を本格的に研究していたので、学問の領域における専門化の必要を理解していた。ロシアで農民崇拜が始った時期に、ラヴロフはすでに中年であった。彼はミハイロフスキーと同じ程度には新しい流れに身をゆだねることなく、ミハイロフスキーの進歩思想における行過ぎと戦った。」<sup>1)</sup>

ラヴロフが当時ロシアの青年たちをとらえ始めていた〈農民崇拜〉に——この〈農民崇拜〉にはラヴロフの〈歴史書翰〉も一役を買ったのであるが——完全には同調できなかったとの Kulczycki の指摘は重要である。これは、ナロドニキ運動の担手たる急進的青年インテリゲンツィアとラヴロフの間にこの時期において存した距りを示している。Kulczycki は、当時ロシアの青年たちがこのミハイロフスキーとラヴロフの論争に対してどのような態度をとったかははっきりとはわからないが、恐らく彼らは前者の側に立ったものと推測できる、としている。<sup>2)</sup> もっとも Ладоха の指摘するように「ラヴロフは後にトカチヨフとの論争の間に、農民層を革命の基本勢力としてさらに推し出し始める」<sup>3)</sup> のであるが、このトカチヨフとの論争は〈前進〉の創刊後のことである。<sup>4)</sup>

亡命を決意したラヴロフは、1870年2月27日流刑地のカドニコフ Кадников を立って、3月13日目的地のパリに着いたが、この5カ月後の8月5日彼は故国の息子 M. П. ラヴロフ宛の手紙<sup>5)</sup> で、この亡命について次のようにいっている。彼は初め自分には3つの分野で、すなわち教育者として、研究者・文筆家として、それからゼムストヴォの代議員として活躍する能力があると考えていた。しかし逮捕されて裁判にかけられたため研究者・文筆家としての途だけが残されることになった。ところが、後になって、流刑生活を送っているはこの研究・文筆活動も継続の困難なことがわかって来た。そこで彼は、「私には十分な形式的根拠すらない判決に服する権利はなく、自分の研究・文筆活動の継続が可能であるような状態に自らを置く義務がある、と自分にいいかせた。」  
「しかし——と彼は続けて書いている——

祖国とのつながりを絶つことは一時的にせよ極めて辛いことである。祖国にとどまり、祖国と形式的なつながりを保ちながら、祖国のために役立つ人は、このつながりを維持すべきである。亡命することは私には非常にかたしいことであつた。だから私は誰にも極度の必要がない限り亡命することをす

1) Kulczycki, a. a. O., II, S. 56-57. なおミハイロフスキーは1842年の生れでラヴロフより19年若かった。また学者としての教養の点でも彼はラヴロフに劣っていた。しかし思想の独創性の点では「折衷主義者」のラヴロフより彼の方に注目すべきものがあつた。

2) Ebenda, S. 60. なお Книжник-Ветров は、Kulczycki とは逆に、「革命的青年達は当時〈進歩の公式〉をミハイロフスキーではなしに、ラヴロフに従って受取った。」としているが、これに関する彼の論証は説得力がない。(Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 48)

3) Ладоха, Указ. ст., стр. 422

4) この論争の口火を切つたのは、П. Н. Ткачев, Задачи революционной пропаганды в России. Письмо к редакции журнала «Вперед», Лондон, 1874 と、これに対するラヴロフの反駁, Редактор журнала «Вперед», Русской социально-революционной молодежи. По поводу брошюры «Задачи революционной пропаганды в России», Лондон, 1874 である。F. エンゲルスが介入したことで有名なこの論争は別稿で紹介する予定である。

5) この手紙は Материалы для биографии П. Л. Лаврова, I, стр. 34-39 に収められている。

すめない。祖国における有益な活動のすべての途が絶たれた時だけ、その時だけ亡命は容赦されるべき、あるいは義務的なものである。私には途が絶たれていた。」<sup>1)</sup>「私は、もしペテルブルクで静かに生活し、そこの図書館を利用して研究に従事することが許されるなら、喜んでロシアに戻るであろう。…将来の私の活動は、私の予測できない諸事情に左右されるが、現在は私の学問研究を続けることが、私の仕事の主要な、そしてほとんど唯一の目的である。」<sup>2)</sup>

このように書いているラヴロフは事実4月パリの人類学会に加入してその熱心な会員として活躍している。<sup>3)</sup>それでも亡命者の間では、<歴史書翰>の筆者たるラヴロフは有力な政治的亡命者とみなされ、この年バクーニンから、次いで翌年別の亡命者から政治的雑誌の刊行について協力を求められているが、ラヴロフは両方とも断っている。<sup>4)</sup>したがって、かつて Н. С. Рusanов が主張したように、ラヴロフは「活発な政治闘争に参加することを望んで」亡命したとする<sup>5)</sup>ことはできない。Книжник-Ветровはこの Рusanов の主張を「完全に正しい」としているが、彼の説明<sup>6)</sup>は納得できない。Рusanов に代表される見解はすでに Витязев によって、上に一部を引用した手紙を最も有力な論拠として、反駁されており、Meijer も、「彼は革命家になるためにロシアを去ったのではなかった。」<sup>7)</sup>と結論している。もっとも Meijer は Витязев のように、「ラヴロフは亡命の最初の数年間社会主義から遠かった」<sup>8)</sup>とするのは、行過ぎであるとしており、そしてこの Meijer の批判は根拠をもっている。<sup>9)</sup>上に引用した手紙が、当時なお帰国の可能性について考えていたラヴロフによって、検閲を考慮して書かれた可能性を Витязев は軽視している。それからまた Книжник-Ветров の指摘しているように、<sup>10)</sup>ラヴロフが、故国に残して来た子供たち<sup>11)</sup>のために、彼らに対する官憲の迫害と彼の財産の没収を恐れ、この手紙で自分の亡命の非政治性を力説しようとした可能性も考えなければならない。しかしこのことを理由に、Книжник-Ветров のように、この手紙の史料的价值をほとんど全面的に否定するのは、これまた1つの行過ぎである。「学門だけで満足するには、ラヴロフは生来あまりにも非書齋的な人物であり、パリに移ったのもそのためではない。」と、Книжник-Ветров はいっている<sup>12)</sup>が、ラヴロフを生来行動的な人物ととらえる点は承認しがたい。亡命後のラヴロフの行動もこの Книжник-Ветров の説を裏書きしていない。

1) Там же, стр. 36-38

2) Там же, стр. 39

3) この学会 La Société d'anthropologie de Paris におけるラヴロフの仕事については Витязев, Указ. ст., стр. 13 をみよ。

4) Cf. Meijer, op. cit., 67, 112; Витязев, Указ. ст., стр. 13; Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 58-59

5) Н. С. Руанов, Социалисты Запада и России, 2-ое изд., Спб., 1909, стр. 228

6) Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 50

7) Meijer, op. cit., p. 112

8) Витязев, Указ. ст., стр. 13

9) Cf. Meijer, op. cit., pp. 191-2, n. 8

10) Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 14-15

11) 当時長男が22歳、娘が19歳、次男が15歳で、この子供達の母親は死没していた。

12) Там же, стр. 52. なおラヴロフの亡命の主目的が政治的なものであったとする Книжник-Ветров は、ラヴロフが帰国の可能性を考えていたとすることには反対である。(Там же, стр. 59)

## 三

ラヴロフにおける社会主義思想の成熟とロシアの革命運動への彼の接近の過程において特に重要な意義を有したのは、1871年のパリ・コンミュンへの彼の参加と、この時期における彼のマルクス、エンゲルスおよびインターナショナルとの交渉であった。これについて例えば Ладеха は、「この時期はラヴロフの生涯における転機であった。この時までラヴロフは穏健な社会主義者、いやむしろ急進主義者<sup>1)</sup>でさえ、あった。コンミュンの後彼の中で一定の社会主義的で革命的な見解が形成された。」<sup>2)</sup> Kulezycki は、「ラヴロフは西ヨーロッパ、特にフランスの社会・政治生活を観察し、かつマルクスの学説を学んだ後、完全な社会主義者かつ革命家となり、生涯を通じて変らなかった」と述べている。<sup>3)</sup> この点は最近のソヴェトの文献も同様であって、例えば Ш. М. Левин は、「活動的な革命家へのラヴロフの転化は、彼がその目撃者でかつある程度は参加者であったパリ・コンミュンの影響なしには、実現されなかった。1871年以来ラヴロフはマルクス、エンゲルスと連絡を保った。」<sup>4)</sup> といっており、Козьмин は、「インターナショナルの活動とパリ・コンミュンの事件はラヴロフの政治的見解の発展に強い影響を及ぼした。」<sup>5)</sup> としている。Kulezycki のように 1871 年にラヴロフが完全な革命家になったとすることには、後にみるように問題があるが、パリ・コンミュンの時期における体験が彼の思想に深刻な影響を与えたことは否定できない。

ラヴロフはパリ・コンミュンの歴史的意義を最初に評価し得た人物の 1 人であった。1871 年 3 月 18 日のパリ・コンミュン勃発直後、早くも彼はブリュッセルの新聞〈ランテルナショナル〉への 3 月 21 日付の通信<sup>6)</sup>の中で、この革命の主役が「全く無名の人々」であって、「公衆に知られているいっもの役者たちがこの劇には加わらなかった」ことを指摘し、さらに次のように誌している。

「疑いもなくそれはただの労働者であり、最近の運動の独自性をなしているのはこれある。それを特徴づけているのはこれである。歴史の明白な事実の中に社会の中で動いている目にみえない力を研究している真面目な思想家達にとってと同様、すべての社会主義者、インターナショナルのすべての支持

1) «急進主義者 радикал» という言葉は、ロシア語、特にソヴェトの文献では、ブルジョア左派を意味することが多く、内容的には、「改良主義者」とでも訳す方が適当な場合がある。

2) Ладеха. Указ. ст., стр. 415

3) Kulezycki, a. a. O., S. 27

4) История СССР, II, под ред. М. В. Нечкиной, Москва, 1955. стр. 583

5) Козьмин. Указ. соч., стр. 392

6) «L'International» は 1869 年 1 月 16 日にブリュッセルで発刊されたバクレーン派の週刊新聞。この新聞の 115 号 (1871 年 3 月 26 日) と 116 号 (4 月 2 日) に L. Pierre の署名でパリ・コンミュンについてラヴロフの送った通信が、「Correspondence de Paris」の表題で掲載された。この 2 通の通信は L. Pierre がラヴロフであることを確証した Книжник-Ветров によって、彼の編集した《Лавров, Избр. соч.», I, стр. 449-55 に全文記載されており、部分的には Venturi, op. cit., II, pp. 739-40 と Meijer, op. cit., pp. 113-14 にも引用されている。この史料が利用されていない点で Витязев の研究の 1 つの弱点をなしている。《L'International》とラヴロフの関係については Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 65 及び Лавров, Избр. соч., I, стр. 488-89, прим. 363 をみよ。この註で Книжник-Ветров は、ラヴロフの通信を、「ヨーロッパの社会主義的印刷物におけるコンミュンの最初の革命的評価」としている。

者にとって全く特殊な関心を、この運動に与えざるを得ないのはこれである。」「これらの労働者はパリの国民軍の大多数を1つの強力な全体に組織することができた。……誰にも知られていないただの労働者が、法を維持する力を数日間で組織することができた。」

続いて3月28日付の通信でも彼はいつている。

「これは、その力において誠実で平静なプロレタリアの、ブルジョア社会の頽廃したすべての力に対する勝利である。プロレタリアートを搾取し、頽廃させるこのブルジョア社会はなんらの存在理由をもたないことを、社会主義思想家は、このほんの数日の出来事を研究することによって、より多くの確実性を以て断言することができる。……今やパリはすべての真の進歩の友、とくにすべての国の社会主義者の心からの共感を要求する権利がある。」

同じ3月21日ラヴロフはまた、ペテルブルクの知人シュターケンシュネイデル<sup>1)</sup>に宛てた手紙で、「歴史の舞台にはじめて野心家ではなく、ほらふきではなく、勤労者が、本当の人民に属する人々がいる。……私はこの党派に非常な共感を覚える。」<sup>2)</sup>と書き、5月17日には、「パリの闘争は現在歴史的な闘争であり、パリは今事実上人類の最前列にいる。もしパリが自らの防衛に成功するならば、それは歴史をいちじるしく前進させるであろう。しかしかりにパリが倒れ、反動が勝利を得ても、人民の、本当の人民の出身で、政治の指導者となった若干の無名の人々が証明した思想——この思想は死滅しないであろう。」<sup>3)</sup>と報じている。コンミュン崩壊後の10月22日にも彼はやはりシュターケンシュネイデル宛の手紙で、パリ・コンミュンを新たな「輝かしい国家形態」を示したもののとして、「今やこの形態は一時的に実現された。……勤労者による統治の可能性もまた証明された。」と誌し、この手紙を次の言葉で結んでいる。

「1871年のパリ・コンミュンは人類の歴史の重要な時期となり、この日付は忘れられることがないであろう。」<sup>4)</sup>

しかしラヴロフのコンミュンへの参加は決して直接のものではなかった。パリに戦闘が始った時、「小銃の弾道についてはすべてを知っていたが、実際の戦闘については知らないも同然であった見透しのきかない大佐は、パリではほとんど役に立ちようがなかった。」<sup>5)</sup>彼はコンミュン当局へ学校教育の組織についての協力を申出たが、情勢が悪化して学校教育どころではなくなった。そこでラヴロフはコンミュンへのインターナショナルの協力を求めるべく、5月初めベルギーとイギリスへ旅立った。ロンドン滞在中の5月17日に出した前掲の手紙の中で彼は、「現在の運動の有力者たちとのあまりに短い交渉が、この運動に十分精力的に、また十分有益に参加することを許さないことは、非常に残念である。」と述べる一方、「私は、ペンを手にしてここにいる方が、全く私の柄にもないことだが騎銃だけを手にしなければならないあそこにいるよりも、あその私の友人たちにより役立つことを期待したのである。」<sup>6)</sup>といつている。また M. П. サージンによると、ラヴロフはロンドンへの出発前にサージンにいつている。

1) Елена Андреевна Птакеншнейдер. 以下に見るが如く亡命後ラヴロフがこの婦人に宛てて出した多数の手紙は、70年代初頭のラヴロフを理解するための重要な史料の1つである。

2) Гол. мин., 1916 г., No. 7-8

3) Там же

4) Там же

5) Meijer, op. cit., p. 114

6) Гол. мин., 1916 г., No. 7-8

## ラヴリズムの形成

「コンミュン派に助力することは私にはできない相談だ。私は学問の人 *Человек науки* なのだから。私はロンドンでペンを手にして彼等のためにより多くをなすことができる。……私はロンドンに行く決意を固めた。ここで起っていることはすべて狭義には私の問題ではないから。」<sup>1)</sup>

これらの言葉から、*Витязев* とともに直ちに、「ラヴロフのそれ（コンミュン）への参加はむしろエピソード的性格をもち、有機的なもの、彼の個人生活全体、当時の彼の志向および信念全体と堅く結びついたもの、ではなかった。」<sup>2)</sup>と結論することには問題があるとしても、ラヴロフがコンミュンの全時期を通じて自己を革命家・革命の実践家としてよりは、より多く学者・ペンの人として意識していたことは明かである。<sup>3)</sup>そして彼は、コンミュンが倒れて彼の旅行の目的が無意味になった後、7月20日パリに帰って研究生活に戻っている。「私は大いにかつ多面的に勉強しており、そしてもっと激しくかつもっと多面的に勉強できている。これ以外に一体することがあろうか！」<sup>4)</sup>というのが、研究生活を再開した直後のラヴロフの心境であった。

パリ・コンミュンの9年後ラヴロフは<1871年3月18日>なる小冊子<sup>5)</sup>を発表した。*Meijer* にれば、「その主要なテーマは、革命のための注意深い準備の必要と政治的要素に対する社会的・経済的要素の優越ということであった。」<sup>6)</sup>このような見解はしかし、この書物で始めて発表されたものではなく、すでにコンミュン以前にラヴロフがもっていて、コンミュンの崩壊後間もない時期にその教訓として引出し、その後も<前進>を始め機会あるごとに力説していたところのものであった。コンミュン勃発直前の1871年3月9日ラヴロフはシュターケンシュネイデル宛の手紙の中でいっている。

「今は歴史を急ぎ立てることはできない。」言葉と行為によってひたすら組織の強化を助けるべきである。わが国の著名な亡命者達の最大の誤りは、あたかも政治的変革が問題であるかのように、彼等が急ぎ立てている点にある。」<sup>7)</sup>

コンミュン崩壊後の8月5日に同じくシュターケンシュネイデルに宛てた手紙でもラ

1) *Гол. мин.*, 1919 г., No. 10, стр. 125-26

2) *Витязев*, *Указ. ст.*, стр. 15

3) この意識が他面において、ロシアの貴族インテリゲンツィアに共通の「余計者」の意識をとまなっているように思われる点は注目されてよい。

4) シューターケンシュネイデル宛の手紙, *«Гол. мин.»*, 1916 г. No. 9

5) 18 марта 1871 года, *Женева*, 1880. これはこの前年ラヴロフが自宅でロシア人の青年にパリ・コンミュンについて行った講話をまとめたもの。1919年以後 *«Парижская коммуна 18 марта 1871 года»* の表題で何回か出版された。但し本編の筆者はこの文献を見る機会をもたなかった。

6) *Meijer*, *op. cit.*, p. 114

7) この思想をラヴロフはインターナショナルのロシア人セクトの機関誌 *«Народное дело»*, 1869 г., No. 7-10 から学んだ, と *Книжник-Ветров*, *Указ. ст.*, стр. 62-3 はしている。*Книжник-Ветров* は概してこのロシア人セクトのラヴロフへの影響を重視する立場をとっているが、*Meijer* はこれに批判的である。(Cf. *Meijer*, *op. cit.*, p. 192, n. 8)最近その著書 *«Русская секция первого интернационала»* で *«Народное дело»* の歴史を詳論した *Б. П. Козьмин* も、「70年代初頭ロシア人革命家の間に存在したすべての革命グループのうちで、思想的に *«Народное дело»* のグループに最も近かったのは、雑誌 *«前進»* のまわりに集った *П. Л. ラヴロフ* の指導するグループであった。」(стр. 390-91) としながら、ラヴロフが *«Народное дело»* の思想を全面的に受入れたとする *Книжник-Ветров* の説は誤っていると述べている。(стр. 392-95)

8) *Гол. мин.*, 1916 г., No. 7-8—この引用は *Книжник-Ветров*, *Указ. соч.*, стр. 61-62 によったが、*Meijer*, *op. cit.*, p. 193, n. 19 では、この言葉が2月5日付の手紙のものとなっており、言葉使いもやや違う。

ヴロフは、「わが国の青年たちは将来のために準備すべきである。それはほんの少し前に考えられていた程に不可能では決してない。」<sup>1)</sup> といっている。さらに10月22日付の手紙の中にわれわれは次のような言葉を読むことができる。

「人類にとって本当に進歩を希望する者、社会的変革の途によってのみこの進歩が現在は可能であることを知っている者、歴史の行程を深く立入って考察することに慣れていて、歴史の披針を用いて人類の傷から流れ出る多少の血や膿を恐れない者——こういった者にとってパリ・コンミュンは最も注目すべき歴史現象の1つ、歴史の最も興味深い、また説得的な解答の1つである。」

そして、この解答は社会主義に、それがこれまでもったことのない連邦主義という綱領を与えつつある、とラヴロフは付言している。<sup>2)</sup> この手紙における連邦主義の主張は、彼がやはりシュターケンシュネイデル宛の翌1872年2月16日付の手紙で、「一群のジャコバン主義者が社会主義者を邪魔し、彼らを無力化した。」<sup>3)</sup> としていることとも対応する。要するに、「1871年の革命は社会革命ではなかった。しかしそれはそれへの接近であった。これがその不変の功績であって、私がそれを歴史の重要な時期と考えるのもこのためである。」<sup>4)</sup> というのが、コンミュンの崩壊から数カ月後のコンミュンに対するラヴロフの評価であった。

ところでこのような政治革命に対する不信は、コンミュンの激闘の最中とその直後には、もつと激しく、政治家、さらに政治一般に対する不信・反撥として表現された。彼は3月26日に行われたコンミュンの選挙の直前に、<ランテルナショナル>紙への通信において、「あまりにも著名なこの紳士たち、この弁護士たち、このジャーナリストたちが……出来上ったことを無駄にしないでくれればいいが。」<sup>5)</sup> と危惧を表明している。また彼はその手紙の中で、「私には、パリのこれらすべての法律機関、これらすべての代議員とその措置は、台無しにすることしかできないように思われる。これらすべては守旧者、おしやべり屋、腰ぬけであり、これはすべて腐っているから。」<sup>6)</sup> と書いている。さらに彼は「政治の中にあるものはすべておぞましく、語らない方がましな位である。」とシュターケンシュネイデルに報じ、またしきりに「急進主義の美辞家達」を攻撃している。<sup>7)</sup>

これらの言葉から Витязев は、「コンミュンの諸事件がラヴロフに議会活動全体と政治活動一般に対する嫌悪を起させ、彼をして社会問題に優先的価値を与えしめた。」<sup>8)</sup> と結論している。Витязев はこの場合2月革命のゲルツェンへの影響と同じようなものを見ているわけである。しかし彼の結論は若干の修正を要するようと思われる。コンミュンは、上に述べたようにすでにコンミュン勃発以前に表明されていた政治革命に対するラヴロフの不信を強める役割を果たしたとみるべきであろう。またコンミュンの政治に対

1) Гол. мин., 1916 г., No. 7-8

2) Там же — 傍点は引用者のもの.

3) Гол. мин., 1916 г., No. 9

4) Там же

5) L'International, No. 115

6) Гол. мин., 1916 г., No. 7-8

7) Там же, No. 7-8, 9

8) Витязев, Указ. ст., стр. 16

するラヴロフの態度については、理論家・学者としてのラヴロフの現実政治に対する嫌悪・反撥の感情といったものも考慮されなければならないように思われる。これは次に述べるマルクス派の革命運動に対する彼の態度を決定した一要因でもあった。

ベルギーとイギリスへの旅行の間にラヴロフは始めてマルクス、エンゲルスと会見し、またその他のインターナショナルの指導者とも識合った。インターナショナルには彼はすでに前年(1870)秋に加入していた。<sup>1)</sup>「インターナショナルの出現とラヴロフがそれを知ったこととは、——とラヴロフは後に自分自身について語っている——第1に社会的変革のための地盤が存在していること、第2に階級的利害の和解し難き闘争が存在していることを彼に確信させた。それ以来ラヴロフは、インターナショナルの綱領で要求されている形での社会的変革に参加することを、彼の義務と考えた。」<sup>2)</sup> また彼は同じ自伝の中で、「自己を、マルクスの理論を知って以来、その弟子」と認めている。<sup>3)</sup> そして事実インターナショナルの役割は綱領<前進 !>でも重視されており、この綱領をのせた<前進> 1号には、<国際労働者協会の発達概要>なる長い記事<sup>4)</sup> ものせられた。またラヴロフの著作には晩年のものに至るまでマルクス主義の影響が認められる。<前進>の記事についていえば、何よりも綱領<前進 !>にこれが認められる他、例えば<前進> 27号<sup>5)</sup>の巻頭論文<労働者社会主義 Рабочий социализм>で、ラヴロフは、「労働者社会主義は資本制的な社会体制から宿命的につくり出される歴史的段階であり、……この体制の発達そのものが社会的変革への必然的な準備を成している。」<sup>6)</sup>と書いている。このため当時、バクーニン派が<無政府主義者>と呼ばれたのに対して、<前進>に拠るラヴロフ派はしばしば<マルクス主義者>と呼ばれた。<sup>7)</sup>

しかしパリ・コンミュンとの関連でいえば、誰よりもラヴロフにとって、「パリ・コンミュンの諸事件はその当時におけるインターナショナルの強さの幻想を取除いた」<sup>8)</sup>のであり。<sup>9)</sup> またコンミュンから上記の如き教訓を引出したラヴロフは、コンミュンに対する評価において当然マルクスと立場を異にし、<sup>10)</sup> 政治革命を社会・経済革命への一段階としてすら認めることに否定的態度をとったのであった。彼はマルクスの理論から、歴史における経済的要因の重要性という側面を学びとったのであって、そしてこれがマルクス主義の彼に対する影響のほとんどすべてであった、ということができる。Иванов-Разумник の指摘しているように、「ラヴロフは<前進>(1873~76年)においても、後

1) ラヴロフのインターナショナルへの加入への事情については、См. Книжник-Ветров. Указ. ст., стр. 59-61

2) П. Л. Лавров о себе самом. «Вестник Европы», 1910 г., No. 11. стр. 99

3) Там же, стр. 90

4) Очерк развития международной ассоциации рабочих, «Вперед». I. стр. 110-177

5) 1875年10月15日号

6) Лавров, Избр. соч., IV, стр. 133

7) См. Тун. Указ. соч., стр. 83, прим. 2; J. Maynard, Russia in Flux, N. Y., 1951, p. 118  
但し、ラヴロフ派に対するこのような呼方が、ある程度当時のロシアにおけるマルクス主義に対する不十分な理解によるものであることはいうまでもない。

8) Лавров, 18 марта 1871 года, стр. 191

9) インターナショナルがコンミュンにほとんど何らの有効な援助を与え得なかったことは周知の事実である。

10) マルクスによる評価については、K. Marx. The Civil war in France をみよ。

のその遺著（〈歴史理解の課題〉、1900年）においても、主要なかつ一般的な点では〈歴史書翰〉の観点を堅く守った。<sup>1)</sup>のであって、<sup>2)</sup>「ラヴロフは、彼自身の保証にもかかわらず、マルクスの追随者になることができず、事実上その生涯の終りまで空想的社会主義者にとどまった。」<sup>3)</sup>ということが出来る。

マルクス主義に対するラヴロフのこのような態度は、彼の思想の大きな特徴をなしていた折衷主義<sup>4)</sup>の1つの表現であるが、実践面でもラヴロフは、インターナショナル内部でのマルクス派とバクーニン派との対立に対してはっきり一方に組することなく、むしろ両者の調停をはかろうとした。<sup>5)</sup>しかし根本的には彼の立場はマルクス派よりも無政府主義的なバクーニン派に近かった。<sup>6)</sup>彼はマルクス派には、バクーニン派に対する以上に、自己にとって異質的なものを感じたのであった。これについて П. А. Кротокинは、「彼はあまりに博識でかつあまりに哲学者であったため、ドイツ社会民主党に、その中央集権的国家の理想の点で、あるいはその狭い歴史解釈の点で、加わることができなかつた。」<sup>7)</sup>といている。

#### 四

かくしてパリ・コンミュンの時期における体験によってラヴロフが西欧とロシアの社会主義と革命運動にどれほど接近したかはほぼ明かになった。Книжник-Ветровは1872年初めまでのラヴロフの思想と実践活動を検討して、「ラヴロフは1872年3月ロシアからの使者達が彼に“ロシア語の海外雑誌の刊行を組織すること”<sup>8)</sup>を申出た時、革命・社会主義・労働運動に対し、てコジミンが不当に主張しているよう<sup>9)</sup>に、“理論的関心”だけしかもたなかつたのではない。」と結論している<sup>10)</sup>が、この結論は慎重な検討を要す

1) Иванов-Разумник, Указ. соч., II, стр. 32

2) Ладоха も、「ラヴロフはその見解の諸部分における動揺にもかかわらず、歴史的理論の基本的主張においては、その生涯の終りまで《歴史書翰》における立場に止った。」としている。(Ладоха, Указ. ст., стр. 354)

3) История СССР, II, под ред. Нечкиной, стр. 583

4) この折衷主義は、ラヴロフの思想を論ずるものがほとんど例外なしに指摘している点である。26頁、註7にあげた文献を参照。なお F. エンゲルスは、「哲学の方面では、ピョートル君は折衷主義者であつて、多種多様な体系や理論のなかからもっともすぐれたものをえらびだそうと努力している。すなわち、すべてを試験してもっともすぐれたものを保存せよ、というわけである。」と評しており、(大月版「マルクス・エンゲルス選集」13巻、上、98頁)、プレハノフは、「ラヴロフの著作の中では時に史的唯物論の決定的な承認に出あうことができるが、この承認は彼の史的観念論とはげしく矛盾しており、そしてこうしたことが正に可能なのを説明するのは、実に全く、他のすべての見解におけると同様歴史に対する見解において、ラヴロフが爪の先まで折衷主義者であつたということである。」(Г. Плеханов, Соч., т. ХХIV, стр. 87)と述べている。

5) См. Козьмин, Указ. соч., стр. 394-95; Левин, Указ. соч., стр. 318

6) もっともラヴロフは70年代中頃からその無政府主義的傾向を修正し、—これをよく示しているのは1876年に発表された彼の《Государственный элемент в будущем обществе》(Избр. соч., IV, стр. 207-396 所収)である—80年代には、社会経済革命に対する政治革命の優先を主張する《人民の意志 Народная воля》の支持者にさえなっている。

7) P. Kropotkin, Ideals and Realities in Russian Literature, London, 1905, p. 277

8) Лавров, Народники, стр. 49

9) Б. П. Козьмин, Ткачев и Лавров, Сборник, I «Войнствующий материалист», Москва, 1924, стр. 300

10) Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 74.

る。確かにラヴロフはコンミュンの時期にほぼ完全に社会主義者となり、また社会主義の実践運動にも一時かなり接近した。しかし彼のコンミュンへの参加は、決して「エピソード的性格」のものではなかったにしても、多分に他律的なものであった。Книжник-Ветровはこの点を無視している。また同様に彼が無視している点であるが、ラヴロフはこの時期を通じてなお自己を何よりも学者として意識しており、革命運動の指導者といったものからは程遠い存在であった。そしてこの学者的性格はまた彼の社会主義に、政治革命に対する強い不信、革命における知識と準備の必要という、いわゆるラヴリズムの特色を当時すでに与えていた。<sup>1)</sup>

したがって、1872年3月ロシアの革命運動のための機関誌創刊の話がもちこまれた時、ラヴロフがこの申出を予想外のものとして受取ったのは当然のことであった。彼は後に書いている。

「1872年の3月まで私は、ロシアの革命運動への私の参加は不可避免的に、そして常に、非合法出版物への何らかの文筆上の協力にだけ限られ、この出版物の何らかの分野の指導が私の手に移ることは決してあり得ないと完全に信じていた。」<sup>2)</sup>

また彼が、その持前の受動的性格と一種の使命感から、結局この申出を受入れながら、その場合この申出のイニシアティヴをペテルブルクの文筆家達のものとして推測し、この推測に立って合法運動をも容認するような綱領草案を書いたことも、当時の彼の社会主義と革命運動に対する接近の程度を考えれば、むしろ当然のことであった。この申出を契機にロシアの革命運動へ一歩をふみ出しながらも、彼はなお、このような多分に妥協的な綱領をかかげる機関誌の編集者となるのが、自分にとって可能な限度である、と考えており、言葉の真の意味における革命運動の指導者となるようなことは考えていなかった。彼はその「推測的理論」に立って書いた綱領草案が受け入れられなければ、機関誌の編集を辞退するつもりでいた。後に彼は第1次綱領草案の執筆当時の心境を回想している。

「私は、ロシアにおける文学的・政治的組織と〈増大しつつある力〉に関する私の推定の誤りであることがわかったら、事は綱領の草案にとどまり、事をそれ以上進めることを私に強いるものは何もない、と自らに語った。」<sup>3)</sup>

ところでこのラヴロフの推定は、その後ロシアの「文学的・政治的反対派」・ペテルブルクの「急進的文筆家の代表者達」との連絡の結果、同年秋までにその「誤りであることがわかった」が、<sup>4)</sup> それにもかかわらず彼は「事をそれ以上進めること」をやめなかった。この間の事情をラヴロフは後に自ら次のように説明しているが、この場合にもわれわれは彼の受動的・他律的性格と一種の使命感をみることができる。

「私の推定は完全に空想的なものであることがわかった。急進的文筆家達は非合法出版物を地盤とす

1) 但し、政治革命への不信については、ゲルツェン以来のロシア革命思想の伝統と共に、パリ・コンミュンがロシアばかりでなく全ヨーロッパの社会主義者に一恐らく、マルクス主義者を例外として一時、政治革命への強い不信の念を植えつけたという、Богучарский, Указ. соч., стр. 92-5 の指摘している事実も考慮しなければならないであろう。

2) Лавров. Народники. стр. 51

3) Там же, стр. 52

4) Cf. Meijer, op. cit., p. 116

る闘争のために自らを組織しようとは決して思っていなかった。その代り、青年層の間における興奮状態について、彼等の間における〈増大しつつある力〉について、有力な機関誌の不足によるこの運動における統一の欠除について、最後に、すでに亡命者の間ばかりでなくロシア本国においても活発で精力的な青年グループが存在していることについて、最も好ましい報道が存在した。私への呼びかけは、激動していて精力的ではあるが統一と一定の方向を欠いているこれらの青年から発したものであり、他のよりふさわしい人物がいないために、私はそこでどうやら本当に必要とされており、これまでバクーニズムの一的般原則にとらえられて来た連中の間にさえ、私とその活動の若干の側面に共感も協力もできなかったバクーニ派とネチャーエフ派のグループの他に、私がより共感できる別の方向に従う気持のある分子が存在している、との印象を——恐らく、私の若い友人<sup>1)</sup>の話を十分批判的に検討することなしに——私は受けた。能力の許す限りこの新しい〈増大しつつある力〉に協力して、これを、私にもっとも正しいと思われる方向に発展させるべきでないか、そうする義務があるのではないか、という問題が私の前に提起された。<sup>2)</sup>

かくして、ペテルブルクの「急進的文筆家達」のための雑誌の編集ということを自己に可能な限度と考えていたラヴロフに、「急進的文筆家達」よりも恐らくさらに急進的なロシアの青年たちの指導者として立つ決意をさせたのは、何よりも、この青年たちの間で彼に対する期待と支持が強い、という「若い友人」の報告であった。ラヴロフにはこの頃になって始めてはっきりわかったのであるが、ロシア本国の青年たちの間でも、また国外の留学生の間でも、〈歴史書翰〉の著者は特別の尊敬の念をもつて見られていたのであって、例えば、当時ロシア人留学生を最も多く受入れ、同時にロシア人亡命者の一中心でもあったチューリッヒ<sup>3)</sup>には、すでに1872年前半にある種のラヴリズムが存在したことを、後に П. Кротокинはその〈П. Л. Лавровの想出〉<sup>4)</sup>の中で述べている。そして、ラヴロフが1872年11月末パリからチューリッヒに移ったのも、一つには、青年達の指導者として立つことを決意した彼の新たな活動の場として、このチューリッヒが最もふさわしいように思われたからであった。彼はチューリッヒへの出発前に私信においてのべている。

「恐らく私はそこで役に立つであろう。そこには男女のロシア人学生のグループがあり、私の受取った多くの手紙によれば、彼等には経験ある練達の助言者が不足している。……恐らく、青年達のためになんらかの講座を設けることができるであろう。」<sup>5)</sup>

しかし革命家ラヴロフの生誕については、もう一つ無視することのできない契機がある。ラヴロフは〈1873～78年のナロードニキ＝宣伝家達〉の中で、「全く個人的なある事情が丁度この頃私に、運動へ参加する気持をおこさせた。<sup>6)</sup>」と誌している。ラヴロフ

1) この「若い友人」は Сергей Андрейвич Подолинский。1872年の春パリにいた彼は新しい機関誌の編集について最も早くラヴロフに協力を申し出、この機関誌への支持の可能性を打診するためロシア本国と、ロシア人留学生の多いスイスを旅行し、同年秋パリに戻って、実際以上に楽観的な報告をラヴロフにした。

2) Лавров, Народники, стр. 52-53

3) Meijer, op. cit., p. 47 は1873年5月末の Zürich 在留ロシア人学生の数を182人(うち女子学生104人)、ロシア人総数を300人以上と算出している。

4) П. А. Кропоткин, Воспоминания о П. Л. Лаврове, «П. Л. Лавров. Сборник статей», 1922

5) Гол. мин., 1916 г., No. 9

6) Лавров, Народники, стр. 53

自身はこのことについて、この本ではこれ以上の説明を加えていないが、ここで彼が知っている「全く個人的なある事情」とは、彼の愛人 A. П. チャプリツカヤの死のことである。「彼は政治への実践的参加を自分にふさわしくないことと考え、それから極力遠去かっていた。そして生活が彼の期待<sup>1)</sup>の全く空しいことを明かにし、A. П. チャプリツカヤの突然の死が彼の私生活を荒涼たらしめて、合法出版物よりもより魅力的ななんらかの活動の中に忘却を求めるようにしむけた時、その時始めて彼は国外での反政府煽動にむかった。」と、当時のラヴロフを個人的に最もよく知っていた Г. А. ロバーチンはいっている。<sup>2)</sup>

チャプリツカヤ Чаплицкая, А. П. はポーランド叛乱に関係して流刑に処せられ、流刑地でラヴロフと識り合って結ばれたポーランド婦人で、その後 1769 年パリに亡命したが、翌年ラヴロフが亡命して来て再び生活をともにするようになった。<sup>3)</sup> しかし 1872 年彼女は病気になる、この年の秋ブリュッセルで死去した。<sup>4)</sup> М. П. サージンは彼女の死について後に誌している。

「身近かな愛している人——チャプリツカヤはラヴロフにとってそういう人であった——の死は、ひどく彼を動揺させた。当時彼が語ったところでは、彼には生活も、科学的研究と活動もすべてうとましかった。<sup>5)</sup>

また、ラヴロフ自身彼の受けた精神的打撃について当時次のようにいつている。

「もし私が自らのなかにすでにスケプティズムと知的批判を涵養していなかったら、私は今では心靈論者になり、今よりももっと幸福でもっと満足していたであろう、と私は確信している。しかしそのために人間の唯一の尊厳——冷静な思考——を捨ててはならない。だが時にはそうしたくなることを私は告白する。<sup>6)</sup>

この言葉はこの時期にラヴロフがシュターケンシュネイデルに宛てて出した何通かの手紙の一つにみられるものであるが、これらの手紙<sup>7)</sup>はまた、彼の受けた精神的打撃の大きさとともに、彼がこの打撃を契機に革命運動の実践家として立つ決意をした際の心境をよく伝えている。

「私の足の下ですべてが、私の私生活を構成していたすべてが崩壊した。私には惜しいものは何もなかった。もし外的な義務がなかったら、生きるという義務そのものが最低限度のものになった。科学的研究の抽象的関心を、あるいはいかなるものにせよ個人的関心を、自分自身に削り出す力を私は全く感じなかったから、社会への奉仕、社会の利益だけが目的たり得、犠牲といったことは今や問題にならなかった。私は何も、まるで何も犠牲にしない。私には犠牲に供し得るものが今や全くないのだから、…くりかえすが、私には今惜しいものはまるでなく、それ故犠牲にするものはまるでない。」<sup>8)</sup>「あなた

1) 帰国の希望のこと。

2) Гол. мин., 1916 г., No. 4, стр. 198

3) この婦人の亡命がラヴロフの亡命の一誘因にもなっている。

4) См. Витязев, Указ. ст., стр. 20-21. チャプリツカヤのことは、М. П. Сажин がその回想記でわずかにふれているだけで、くわしいことはわからない。彼女の死亡もこの年の9月または10月と漠然と推測される程度である。

5) Гол. мин., 1915 г., No. 10, стр. 121.

6) Там же. 1916 г., No. 9, стр. 132

7) これらの手紙——全部で8通で最初のは10月22日付——は「Гол. мин.», 1916 г., No. 9 に収められている。但しこれらの手紙に直接チャプリツカヤの名前は出て来ない。

8) Там же, стр. 136

も書いているように“すべてを理念の犠牲に”私が正にしているように、あなたには、そしてあなたにもまして、私の心理状態を知らない他の人々には、思われるかも知れないが、私がすでにあなたにいったように、それは幻想であり、私は空手で供物壇に近づくのだから、何も犠牲にしない。だから、私の友よ、不可避的に行われつつあることを私に思い止らせないでほしい。それは私が招いたのではなくて、道徳的義務として私に接近して来たのである。私をさまたげてこの義務に対する私の愛着の均衡を部分的に得さしめることのできたすべての糸を、仮借なき無意識の自然の法則りが引裂いた丁度その時に、接近して来たのである。私が決して何らかの期待に迷わされているのではないことを信じてほしい。しかし、この方向で役立ち得る、この方向に進むべきである、が失うべきものは何もない、という意識はある。純粹に利己的な観点から、私は慎重に行動している——ことによったらそれは私を立直らせるかも知れず、他方その他には何もない——とさえ私は考えている。<sup>3)</sup>

これらの言葉から **Витязев** は、後にラヴロフが自伝で、彼は「＜前進＞編集の申出を受けた時、ロシアにおける社会主義的宣伝の責任を喜んで引受けた。」<sup>4)</sup> といっているのは、当時ラヴロフには、これがチャプリツカヤの死による打撃から立上らせてくれる可能性のある唯一の途と思われたからであり、この途はラヴロフにとって「最後の生死の賭、溺れるものをつかむ藁」であったとしているが、<sup>4)</sup> ラヴロフが＜前進＞の編集を引受けたのは1872年の春で、チャプリツカヤの死は秋であるから、**Витязев** の主張は正しくない。しかし1872年の秋は、ラヴロフが本国とスイスにおけるロシア人青年層の彼に対する支持と期待の強いことを知ったときでもあり、この時期に彼がその最も愛する人を失った意義は大きかった。ラヴロフは10月22日の手紙で、恐らくチャプリツカヤの死からの連想で、1866年の彼の逮捕が当時彼を悩ましていたある恋愛事件から彼を救ってくれたことに言及しているが、これについて **Meijer** は、「これはラヴロフの伝記について、また彼の政治への接近について興味ある点である。」としている。<sup>5)</sup> いずれにせよ、1872年秋における革命家ラヴロフの生誕には多分に偶然的な事情が働いていた、ということができる。

## 五

1872年11月末チューリッヒに移って間もなくラヴロフは3月に書いた綱領＜前進！＞の草案を修正した。この修正は新しい機関誌へのバクーニン派の協力を可能にするためのものであった。バクーニン派の側でこの件についてラヴロフと直接交渉したのは **M. П. サージン**<sup>6)</sup> で、この交渉はラヴロフがチューリッヒに来る前から始められていた。そして、ラヴロフの書いた綱領の「第2次草案はバクーニン派によってむしろ侮蔑的に迎えられた」が、交渉そのものは継続された。バクーニン派は雑誌の編集への参加を強く要求した。しかしラヴロフはこれを拒否し続け、12月15・16日の会合で両者

1) ラヴロフは人間の死をしばしばこういった表現で暗示した。

2) Гол. мин., 1916 г., No. 9, стр. 137

3) П. Л. Лавров о себе самом, «Вест. Евр.», 1910 г., No. 11, стр. 110

4) См. Витязев, Указ. ст., стр. 22, 23

5) Meijer, op. cit., p. 194, n. 31. なお Meijer はこの手紙を4月22日のものとしているが、これは10月22日の誤りと思われる。

6) 彼は当時スイスではその変名 **Arman Ross** で通っていたので、史料にはこの変名で出て来る。

の話合いは決裂した。当時ロカルノにいたバクーニンはこの決裂をむしろ喜んだ。<sup>1)</sup>

第2次綱領草案も、第1次草案同様、その詳しい内容は現在わかっていない。しかし第1次草案執筆後のラヴロフの思想の発展から考えて、第2次草案ではかなりの修正が行われたものと推測される。例えば第1次草案で認められていて最終綱領ではほとんど全面的に否定されている合法活動の有効性の主張の如きは、すでにこの第2次草案で大幅に修正されているものと考えられる。勿論こういった修正はバクーニン派の協力を得るためにも必要なことであった。しかしバクーニン派の協力を求める試みがラヴロフによってなされたということ自体、この間におけるラヴロフの革命運動に対する態度の積極化の結果であった。したがって第2次草案は、直接にはバクーニン派の協力を求めるために書かれたものであったが、それと同時に第1次草案執筆後のラヴロフの思想の進化の所産でもあって、内容もそれを反映していたものと思われる。これは、第1次草案を執筆した際のラヴロフの「推測的理論」の立て方そのものが当時の彼の政治的立場に制約されていて、その草案の内容がこの政治的立場を反映していた、と考えられたのと同様である。

ところでしかし、ラヴロフがバクーニン派の協力を得ることを可能と考えたことは、他面において、現実政治に対する彼の認識がかなり甘いものであったことを物語っている。彼は後にこのバクーニン派との交渉について、「私は、原則的な点ではわれわれの間に反目の理由がないことを示すことが、極めて重要であると考えた。綱領<前進！>の第2次草案は正に、一切の公然たる反目を取除いて2党派の間に平和な和解案 *Modus vivendi* を確立する目的をもって、書かれた。」<sup>2)</sup>といい、そしてそれにもかかわらず、「出版物の原則的な面について共同討議が全く行われず、」「知識獲得の重要性乃至不必要や煽動の戦術などについての問題の如き2次的な論点で衝突が起った」ことを遺憾としている<sup>3)</sup>が、この言葉はラヴロフの妥協的・調停者の性格とともに、現実政治に対する彼の認識と態度の特質をよく示している。確かにラヴロフのいうように、ラヴロフ派とバクーニン派の間には、ロシアにおける革命と社会主義の問題について原則的な不一致はなかった。「ラヴロフ派もバクーニン派も政治的変革ではなしに社会的変革を考えていた。ラヴロフ派もバクーニン派も（後者は特に）社会的改革への前提としても政治的変革を可能かつ望ましいと考えなかったばかりでなく、反対に、社会的なものを政治的なものに鋭く対立させた。」と *Иванов-Разумник* はいっている<sup>3)</sup>が、事実ラヴロフは少くともこの時期には、バクーニン派と同様、政治革命を拒否し、権力一般に否定的で、無政府主義を理想としていた。また彼はミールを未来社会の構想の基礎に置き、連邦制を支持する点でも、バクーニンと一致していた。

しかし「知識獲得の重要性乃至不必要や煽動の戦術などについての問題」は革命党にとって決して「2次的な論点」ではなかった。現実の革命運動においてはむしろこれこそが問題であった。これに関して意見が対立している以上協力関係の設定は問題にならなかった。この点で、ラヴロフは革命運動の実態について、特に革命運動における党派

1) 以上の交渉の経過については、Cf. Meijer, op. cit., p. 117-18

2) Лавров, Народники, стр. 54

3) Иванов-Разумник, Указ.соч., II, стр. 16

の対立について十分な認識をもっていなかった、ということが出来る。これは彼がその人柄からいって「本質的に善意の人 un homme de bonne volonté」であって、「党派的な争をする人で決してなかった」<sup>1)</sup> ためばかりではなく、革命家になる以前に学者であったラヴロフが、革命家になった後にも学者たることをやめず、この学者的特質をその革命理論と革命運動の実践にも持込んだことと関連していた。Л. Э. Шишко の指摘しているように、「ラヴロフの学門上の非常な博識は、戦術の問題ではなしに理論的な問題の分野でこそ、彼を特に強力にしたのであって、直接の革命運動の人ではなくて思想の人であった彼は、戦術の問題では比較的経験がなかった」<sup>2)</sup> ののである。かくて、学者ラヴロフによって書かれた第1次綱領草案の基調たる革命における知識と準備の必要という主張は、第2次草案にも受けつがれたのであって、チューリッヒのロシア人学生に対する彼の熱心な働きかけも、専らこのような見地からなされた。

早くも12月初めラヴロフはロシア人学生を対象とする講義を開設した。彼は初め非専門家のための高等数学の連続講義を行った。これは聴講者が少なくてもなく中止のやむなきに至ったが、ラヴロフがチューリッヒでの教育活動を高等数学の講義をもって始めたことは特徴的なことであった。やがて彼は「思想の歴史におけるスラヴ人の役割について、思想一般の歴史について、思想の歴史におけるキリスト教の役割やそれと同様のテーマについて」<sup>3)</sup> も講義をし、また特に好んで〈哲学入門〉の講義を行ったが、こうしたテーマの扱ひ方にも彼の学者的・教育者的特質と革命運動に対する彼の考え方がよく示されていた。「ラヴロフは、当時青年者を興奮させていた諸問題を全く理解しようとしせず、また顧慮しなかった。彼の講義はすべて様々な歴史＝哲学上の問題にかぎられていて、しかも青年たちが他の問題に心を奪われると、ラヴロフは必ず話を彼の目論んでいるテーマにむけた。」とサージンはいい、さらに、ラヴロフは、「青年たちには確実な知識だけが必要である。」として、インターナショナル、フランス大革命、パリ・コンミュンなどの講義をはっきり拒否した、と誌している。<sup>4)</sup> これはラヴロフが「当時のロシア人青年層から心理的にはなお隔っていた」<sup>5)</sup> ことを示している。

しかしラヴロフの講義の高踏性が、必ずしもチューリッヒにおける彼の人気を傷つけるものでなかったことは後段に見る如くであり、またラヴロフ自身はこのような形での教育活動に生きがいを見出していた。1873年1月13日のシュターケンシュネイデル宛の手紙で彼はいっている。

「昨晚私は哲学入門に関する、哲学とは何かに関する公開講座を行つた。あなたがなんといおうと、私にとってチューリッヒは衛生学的に良い。私は細かい点はともかく一般的には非常に気が静まった。私の講義の後でロシア語の歌が歌われ始めた晩にも、私は逃げ出さず、何のスクャンダルも起きなかった。時が、そして時と一般的問題への従事とが大きな衛生学的治療策であるが、これはこのチューリッヒ

1) Meijer, op. cit., p. 118

2) Тун, Указ. соч., стр. 127

3) П. Л. Лавров о себе самом, «Вест. Евр.», 1910 г., No. 10, стр. 103

4) Гол. мин., 1915 г., No. 10, стр. 141-2

5) Витязев, Указ. ст., стр. 25

におけるほどにはどこでも見出されないであろう。」<sup>1)</sup>

この言葉は、チューリッヒにおける生活と活動によってラヴロフがチャプリツカヤの死による打撃から立直りつつあったことを示している。

講義の他にラヴロフは、しばしば在留ロシア人の会合で自己の所信を述べる機会をもったが、この場合には彼は社会主義と革命に関する自己の見解を説得的に展開して、最初から大きな成功を収めた。この成功の模様をよく伝えているのは、1872年12月4日の A. C. ブトゥルリン宛の B. H. スミルノフの手紙<sup>2)</sup>である。

「ラヴロフは今晚月桂冠を獲得した。……会合には、ゴシップとのしりしか期待せず、われわれの無邪気さを笑いものにしようとしていた若干の人々が出席した。最後にはこの同じ人達がこの会合に熱狂的になった。ほとんどの時間が、ラヴロフと6・7人の人々との間の討論で占められた。秩序は驚くほど守られた。討論された諸問題は高度の現代的関心のあるもので、討論は熱のこもったものであったが、ほんの少しの秩序の乱れもなかった。ラヴロフに対する自分達の反対は原則的なものであると主張した無政府主義者達<sup>3)</sup>が、世界のすべての国家は生命を失っており、国家は消滅して自由な共同体によってとって代られるであろう、等々とラヴロフが宣言するのを聴いた時の、彼等の感情をあなたは想像できる。……多分私は偏っており、不公平である。しかし私は、ラヴロフの人柄はバクーニンのそれよりも強い印象を与え、彼の宣伝はバクーニンのそれよりも大きな効果をもち、ラヴロフはわが愛するミハイル・アレクサンドロヴィチよりもはるかにロシア帝国にとって危険である、との確信を以てこの会合から家に帰った。確かにあなたは J. と B. から全く同じこと——国家は正しい社会秩序と両立せず人は国家の絶滅のために働くべきであるということ——をきく。しかしバクーニンの主張は漠然とした激しい感情の他には証明と論証をもたないが、ラヴロフはこの主張を展開し、証明を引用し、分別ある者には誰にでも不可避的な結論を下す。そして、いかにしてか、といえば、無味乾燥なひじかけ椅子の学者や冷たい哲学者としてではなく、彼の主張を細部まで熟考した確信ある人の情熱を以てである。」

チューリッヒにおけるラヴロフの成功は、彼の活動を妨害しようとするバクーニン派の策動と、これが因になったバクーニン派とラヴロフ派の間の紛争を招いた。チューリッヒには1870年以来、バクーニン派の M. П. サージンがロシア人留学生に対する働きかけを目的に創った文庫があり、これがチューリッヒにおける亡命ロシア人の政治活動の拠点になっていたが、<sup>4)</sup> ラヴロフの講義や演説・討論もこの文庫で行われた。そのため、バクーニン派が多数を占めていた文庫の委員会は、1872年12月15日に臨時集会を召集して、講義や会合への文庫の利用の禁止を決定しようとした。これがバクーニン派とラヴロフ派の紛争の発端で、C. A. ボドリンスキーの率いるラヴロフ派は、在留ロシア人のほとんど全部が出席したといわれる翌1873年2月2日の集会で、サージンなどのバクーニン派との激烈な論争の後退場し、直ちに別の集会を開いて新たな文庫の創設を決定した。文庫の委員の中ではラヴロフ派は少数であったが、文庫の利用者の中では彼らは多数を制していたのであった。<sup>5)</sup> 当時のラヴロフ派の数的優勢については、他ならぬバ

1) Гол. мин. 1916 г., No. 9, стр. 134

2) この手紙は、Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam 所蔵のコピーによって、Meijer, op. cit., p. 199 に引用されている。

3) バクーニン派のこと。

4) Cf. Meijer, op. cit., p. 67-8

5) Cf. Ibid. p. 120-2

クーニンが1873年2月6日付のある私信<sup>1)</sup>において、バクーニン派20人に対してラヴロフ派は105人であるとしている。そして Meijer の指摘しているように、ラヴロフ派の「この数的優勢の重要な理由は、疑いもなく革命と研究の思想の結合であった。バクーニンは研究を放棄して完全に革命に献身することをその身近な追従者たちに要求したが、ラヴロフは学門を通ずる革命への途を示し、かくして学生たちがチューリッヒにやって来たときの心構えを強めた。」のであった。<sup>2)</sup> かくして、研究のためにチューリッヒにやって来て、しかる後に革命の問題に関心をもつようになり、したがって研究と革命運動の両立・統一を望んでいたチューリッヒの大多数の留学生たち<sup>3)</sup>こそが、何よりもラヴリズムの成立の地盤であった。<sup>4)</sup>

## 六

分庫の分裂という事態はラヴロフに大きな精神的苦痛を与えた。彼は文庫の分裂と相前後してチューリッヒへの永住の準備のためパリとブリュッセルへの旅行に出かけ、3月初めチューリッヒに帰ったが、この旅行中の2月16日にパリから出した私信の中で、「チューリッヒ滞在の最近の時期と不在の短い時期におけるほど私の将来の生活であるチューリッヒの生活の諸々の些事とみじめな状態が、私の前に明白に現れたことはかつてなかった。」と述べている。しかしラヴロフは同じ手紙で次のようにもいっている。「そこには、おし流されやすい、そしてその結果、彼らを惹きつける様々な思想に関する正しい展望のための感情を失いがちで、目的と手段の関係をさらに見失いがちな若い人々がいる。しかし一般的には彼らは善良な人々である。」<sup>5)</sup> またラヴロフは後にこの当時のことを回想して誌している。

「1873年春に私が知った如き状況を私が仮りに1年前に知っていたら、私は必ずやこの仕事を拒んだであろう。……しかし1873年春には私は、なお大まかな輪廓しかできていなかった機関誌の周囲に集った頭のよい精力的な青年達に親密な協力を拒否する道徳的権利があるとは、も早考えなかった。こ

1) M. Nettelau, Michael Bakunin, eine Biographie, 3 Bde., London, 1896-1900, S. 763-4 に収められている З. Ралли 宛の手紙。

2) Meijer, op. cit., p. 119-20

3) この留学生達の革命運動への接近の過程は、これをたどることをその《Knowledge and Revolution》の主な課題とした Meijer によって、研究史上始めて詳細にあとづけられた。

4) ラヴリズムの社会的基盤については、Ладоха, Указ. ст., стр. 421-2 が、「ラヴロフは支配階級と関係を絶ちながら完全には生れかわることのできなかつたこの階級出身のインテリゲンツィアのイデオログである」とし、「ラヴロフの思想の最大の成功は、革命的青年層の中で特権階級出身のものが（他の時期に比して）最も多かった70年代初めに当たっている。」としている——この場合、「バクーニン派は下層（小役人・僧侶・農民）出身のインテリゲンツィアの最もプロレタリア的部分」とされる——が、Лавров, Избр. соч. の監修者 И. А. Теодорович もその《Предисловие》で、「ラヴリズムとバクーニズムの見解の不一致の本質は、ラヴリズムが結局のところ、小生産者の右翼の体系であり、バクーニズムがその左翼の体系である、という点に存する。かくてラヴリズムとバクーニズムの論争は事実上、ユートピア社会主義の《右翼》のその《左翼》に対する論争である。」としている（Лавров, Избр. соч., I, стр. IX）。但し両者の主張には具体的な実証は欠けている。

5) Гол. мин., 1916 г., No. 9, стр. 134. なお Витязев, Указ. соч., стр. 134 は、ラヴロフのこのみじめな気持を専ら、チャプリツカヤとの生活の思い出と結びついたパリとの離別の感傷と解しているが、この解釈は一面的にすぎる。

6) Гол. мин., 1916 г., No. 9, стр. 134

の青年達は数においても力においても彼等よりはるかにまさっている昨日の同志達と袂を分ったのであって、その上、私の他には、多少とも知られた文筆上の権威は1人も彼等に組していなかった。私は、私の過去がかかる政治的企てに対する私の能力を、彼等になんら保証していなかった時に私の囲りに集って自発的に私の個人指導に従った人々と共に、全力をあげて闘う道徳的義務を感じた。私は<前進>刊行の重い責任を引受ける覚悟をした。<sup>1)</sup>

かくして<前進>刊行の決意をいよいよ固くして1873年3月初め旅行から帰ったラヴロフは、その直後<前進>の綱領を再度書直してこれを最後のなものとした。そしてこれは先ず3月単独に騰写刷で発表され、次いで7月そのままの形で<前進>創刊号に発表された。<sup>2)</sup> ラヴロフは4月に騰写刷のこの最終綱領一部をバクーニンに送付する際に添えた手紙<sup>3)</sup>の中で、「<前進>の綱領は今や最初あなたに送ったものとは完全に違っています。ロシアにおける協力者の諸グループが、私に、前の草案で後半をなしているにすぎなかったものを、前面におし出すようにさせました。」<sup>4)</sup>といているので、最終綱領での修正が部分的なものに止らなかったことは明かであるが、この修正の内容の正確な点は、第1次・第2次綱領の詳しい内容がわかっていない現在、確かめようがない。しかし、恐らくは、第2次綱領と同様第3次綱領の修正にも、第2次綱領執筆後の生活の体験——ラヴロフ派とバクーニン派の対立、留学生たちとの交渉、本国の革命組織との接触など——によるラヴロフ自身の思想の進化が反映したものと考えられる。したがって、「ラヴロフはその第1次綱領を完全に誤った仮定の上に乗って書いた。それはバクーニン派の反対に應ずるために修正された。今や完全に自分の責任で、そしてロシアとチューリッヒの状況についてよりよい知識をもって、ラヴロフは<前進>の第3にして最後の綱領の執筆にとりかかった。」との Meijer の説明<sup>5)</sup>は、第2次綱領執筆当時から第3次のそれまでのラヴロフその人の思想の推移・進化にしかるべき考慮を払っていない点で、不十分なものといわざるを得ない。同じことは V. H. フィグネルの次のような批評についてもいうことができる。「ラヴロフは3つの異なる方向の雑誌の編集者となる用意があつて、自身3つとも綱領を作成した。」<sup>6)</sup>

もっともこのフィグネルの批評は、われわれがこれまで何回か指摘して来たラヴロフの受動的・他律的な性格、妥協的な態度をついている点では完全に当たっている。「完全に自分の責任で」書いたとされている最終綱領においてすら、ラヴロフは外部からの働きかけにある程度左右された、と思われるふしがある。上に引用したバクーニン宛の手紙

1) Лавров, Народники, стр. 55

2) Meijer, op. cit., p. 148 は Лавров, Народники, стр. 65 に従って、<前進>創刊号の発行を1873年7月としている。他の研究者も多く7月としており、——例えば Bienstock, Histoire du mouvement révolutionnaire en Russie, I, paris, 1920, p. 143; E. E. Kluge, Die russische revolutionäre Presse, Zürich, 1948, S. 71 など——、本編の筆者もこれに従った。しかし Лавров, Избр. соч., II, стр. 22 所収の «Предисловие к I тому журнала “Вперед”» の日付は8月13日(露暦1日)になっており、Тун, Указ. соч., стр. 86 や Venturi, op. cit., II, p. 746 では<前進>の創刊が8月となっている。印刷日と発行日の違いかとも思われるが、正確なことはわからない。なおこの点については Лавров, Избр. соч., II, 394, прим. 9 を参照。

3) Internationaal Instituut voor sociale Geschiedenis, Amsserdam 所蔵のもの。日付は欠けているが、内容からみて、4月16日以前のもの、と Meijer op. cit., p. 198, n. 79 は推定している。

4) Meijer, op. cit., p. 124

5) Вера Фигнер, Студенческие годы, «Гол. мин.», 1922 г., No. 2, стр. 172

にも示されているように、ラヴロフは第3次綱領執筆前に、ロシア本国の革命家と接触を保っていた彼の協力者を通じて、雑誌の革命的な性格を強化するよう申入れを受けており、そしてこの申入れには、当時ラヴロフが自分の側に引入れようと考えていたロシア本国の最も有力なナロードニキの組織チャイコフスキー派 Чайковцы<sup>1)</sup>も関係があったとみられるのである。<sup>2)3)</sup>

ところでフィグネルは上に一部を引用したその〈学生時代〉の中でまた次のような事実を伝えている。彼女が多数の聴衆の前でラヴロフに、二度も綱領を書直した理由を質問した時、「困惑した沈黙が生じた。“ここはこの問題を論ずる場所ではない”。と、ラヴロフは工合悪そうに——と私には思えたのだが——答えた。」<sup>4)</sup>しかしフィグネルの疑問は彼女だけのものではなかった。「私は〈前進〉のこれら3つの異つた綱領のことで激しく攻撃された。」とラヴロフは後に書いている。<sup>5)</sup>そして彼はこれに続けてその間の事情を次のように説明しているが、これは例えば上に引用した Meijer の説明の根拠にもなっているものであって、これが綱領の再度の修正の表面上の理由しか伝えていない一種の自己弁護であることは、われわれがこれまでに述べて来たところから明かであろう。

「これらの攻撃は、これらの綱領で3つの場合全部を通じて1つの目的が予定されていた場合にだけ、完全に正当なものであったであろう。しかし事情は完全に違っていた。第1次の綱領は、1872年の非合法出版界に今や闘う党派として登場しようとしている60年代の急進的文筆家達が出すものと想像された出版物の綱領であった。編集者の個人的意見はこの場合2次的な要素であった。第2次の綱領は、1872年のバクーニンの多くの点に従わないまでも、原則的な面でのロシアの社会革命運動の統一の維持を予定した出版物の綱領であった。編集者の個人的意見は、この統一をそこなわない限りでしかその中に表現され得なかった。第3次の綱領だけが、あるものを掲載し他のものを掲載しないことの完全で排他的な責任を負った編集者の綱領であった。」<sup>6)</sup>

## 七

以上で、本編の執筆に当って筆者が自らの課題としたところはほぼ果されたが、最後に綱領発表当時のその反響について簡単に記しておく。ラヴロフは後に、〈前進〉はそ

1) この団体の中心人物 Н. В. Чайковский が後にロシア革命の際反革命派の一指導者となったため、現在ソヴェトの文献では《Чайковцы》なる名称は使用せず、この団体の成立にも М. Натасонなどがむしろ指導的役割を果たしたとされている。См. Левин, Указ. соч., стр. 355-6

2) Cf. Meijer, op. cit., p. 124, 196, p. 65; Старик, Указ. ст., стр. 14

3) こうした点で筆者は、ラヴロフを「強い、不屈の性格をもった鉄の意志の人」とするロパーチンの見解 (Г. А. Лопатин. Автобиография. Показания и письма, Петроград, 1922, стр. 174)が納得できない。ロパーチンはラヴロフと最も近い人物であっただけに、ラヴロフを理想化している面があるように思われる。同様のことは、このロパーチンの言葉を有力な論拠としてラヴロフの革命性を高く評価している Книжник-Ветров についてもいうことができる。(См. Книжник-Ветров, Указ. ст., стр. 38-9). 従来のラヴロフ観を根本的に修正しようとした彼のこの論文は、若干の点でそれまでのラヴロフ研究の誤りを是正しているが、その立論全体は、「是が非ともラヴロフをポリシエヴィズムに引寄せようとする」(Козьмин, Указ. соч., стр. 393)もので、到底支持しがたい。

4) Фигнер, Указ. ст., стр. 172

5) Лавров, Народники, стр. 55

6) Там же.

の発刊当時、「ロシア人革命家の陣列」の中に、「ロシアのために社会主義の諸原則よりも絶対主義との闘争という政治的課題を上置く」者と、「<準備家達<sup>1)</sup>>の多少とも手間のかかる方策を拒否して、無政府主義的社会主義の名前で、革命的手段に直接訴えることを説く」者との2派の「敵」を有していたことを述べている。<sup>2)</sup>そこで先ず前者の例をあげると、1873年4月24日バリの<民族の前途 Avenir national>誌は、「ロシア人共和主義者の1グループ」の要請によるものとして、以下のような文書を掲載した。この「ロシア人共和主義者の1グループ」の正体ははっきりしないが、ラヴロフにもバクーニンにも批判的なГ. トゥルスキーを中心とするジャコバン的傾向の小グループが、当時亡命ロシア人の間に存在しており、この文書もこのジャコバン派——ナロードニキの歴史の上ではネチャーエフ=トカチヨフの系列に属するブランキスト——の手になった可能性が強い。<sup>3)</sup>

「<前進>という表題で国外で出版されようとしているロシア語の雑誌の編集者は、ロシアの生活の必要に順応するため、雑誌は政治問題を差控えて純粋に社会的な問題だけを扱うであろう、と4月14日、月曜日のフランス共和国 La République française で声明している。その上彼は、進歩のイニシアティブはロシアの農村から起るであろう、と主張している。

共和派のロシア人の本当の愛国者は彼等の国の必要を全く違った風に考えていることを、われわれとしては、観察することが有益と信ずる。ロシアに存在する体制のように専制的で野蛮な体制の下では、政治的自由の獲得は、絶対の必要事であり、従って少なくとも、ロシアの人民ほどに不幸で圧迫されている人民の生活条件を幾分でも楽にせよと思う者にとっては、すべての義務のうちで第1の、最も重大なものである、ということは、若干の空想家を除いて、すべての人がよく知っている。

従って、このような事態において、その綱領から政治問題を敢て削除することができるのは、悪意をもつ者か夢想家か以外にはいない。

他方、ツァーリの専制によって最も深い無知におかれているロシアの農村から進歩のイニシアティブが起ることを期待することは、ロシアの青年達をその最も貴重な期待とその仕事の本当の対象からそらすことを目的とする掛引ではないにしても、1つの非常識であろう。」

無政府主義者=バクーニン派の側からの反響は、1873年秋ジュネーヴで出版されたバクーニンの著者<国家と無政府>の<付録 Прибавление А>によって代表される。<チューリッヒのスラヴ人セクトの綱領 Программа славянской секции в Цюрихе>と題されたこの<付録 А>でバクーニンは、——Meijer の要約<sup>4)</sup>によれば——科学は将来の社会生活の諸形態を定義することはできず、将来の社会生活の消極的条件を述べることができるだけで、これらの条件の一つは無政府である、と説き起し、次いで、教育ある人々だけが人民の権利を理解して革命を実現するであろうと考えて人民の教師になる傾向がロシアに存在することについて語り、このような考えは2つのグループの人々、すなわち、一方では、空論家とほら吹き達、協同組合と人民銀行の創設者達、他方

1) ラヴロフ派のこと。

2) Лавров, Народники, стр. 49-50

3) Cf. Meijer, op. cit., pp. 150, 202, n. 41

4) Meijer, op. cit., pp. 158-59. なおこの<付録 А>は、重要な文献ではあるが、<国家と無政府>の初版以外にはのせられていない模様で、Meijer の要約も、M. Nettleau, Michael Bakunin, eine Biographie, S. 773-5 の résumé と Вд. Буццев (состав.), За сто лет (1800-96), стр. 99-105 の抜萃とによっている。

では、これを唯一の可能な途と考えている真面目な青年たちによって代表されている、として、以下この真面目な青年たちに次のように訴えている。

真の科学を人民に教えることは不可能である。国家はそれを禁じており、農民はその経済的条件が急激に変らない限りそれを理解できない。人民は自主的な行動の方向に教育さるべきである。人民の間に漸進的な経済的進歩をもたらそうとする努力は、ロシアにおいては失敗を運命づけられている。しかし社会革命の見透しはロシアにおいては明るい。そのための2つの条件、貧窮と経済的隷属は満されている。社会的理想が人民の心の中に深く根を下しているかどうか、という第3の最も大切な問題に対しても、肯定的な解答を与えることができる。この理想は第1に、人民の耕す土地が人民に属すること、第2に、土地所有権が共同体にあること、最後に、国家に対する共同体の敵対的態度である。しかし共同体にも暗い面がある。第1に共同体には個人をその奴隷にする傾向があり、第2に共同体は孤立しており、最後にツァーリに対する根強い信仰がある。これらの暗い面をなくすために全力を尽さなければならない。しかし人民は知識がなく、当面の1つの問題にしか関心を示さないから、社会革命と国家の破壊の問題を人民に提示するため青年たちは人民の中へ入るべきである。ネチャーエフ事件<sup>1)</sup>の後青年たちの間には2つの流れがあり、その1つは、革命の準備はするが、近い将来においてそれを起す可能性は信じないものである。

「もう1つの途は蜂起という戦闘的な途である。これだけをわれわれは信じ、これからだけわれわれは結果を期待する。わが国の人民は明かに助けを必要としている。このような絶望的な状態にあるから、どの村でも蜂起させるのに手数はなんらかからない。しかし、すべての蜂起は成功しなくても常に有益であるとしても、ばらばらの一揆では不十分である。すべての村を同時に蜂起せしむべきである。これが可能なことは、ステンカ・ラージンとプガチョフの率いた大きな人民運動によって証明されている。」

次にロシア本国からの反響に移って、先ずあげなければならないのは、＜前進＞の発刊計画に関連してミハイロフスキーがラヴロフに宛てた手紙である。この手紙は2通あって、<sup>2)</sup> 最初のものではミハイロフスキーは、ラヴロフの希望した＜前進＞への執筆を辞退してその理由を述べており、<sup>3)</sup> 後のものでも、前半ではこの辞退の理由をさらに詳述しているが、終りの方でラヴロフの綱領に対する次のような批判的見解を述べている。これはミハイロフスキーがこの手紙の中で、「卒直にいつて私は革命ほどには反動を恐れない。<sup>4)</sup>」といい、また初めの手紙で、「私は革命家ではない——誰にもそのやり方がある。古い神々との闘いは私の関心事ではない。神々の歌は歌いつくされ、神々の潤

1) 1869年

2) これは《Минувшие годы》, 1908 г., I, стр. 125-8 に Два письма Н. К. Михайловского к П. Л. Лаврову として発表され、Богучаский, Указ. соч., стр. 120-23 にも全文が掲げられている。この手紙の日付はわからないが、Meijer, op. cit., p. 196, n. 71 によれば、内容から推して恐らく1873年5月のものである。

3) ラヴロフは最後の綱領を書いた頃、機関誌＜前進＞の見通しについて明るい希望をもっており、その最大の理由は、ロシアにいた А. А. Крил から、ミハイロフスキーを始め何人かの著名な文筆家が＜前進＞への寄稿を約束してくれた、との連絡を受けとっていたことであった。(Cf. Meijer, op. cit., p. 123) しかし Крил の報告は楽観的にすぎた。ミハイロフスキーは、「われわれの仲介者は事態を有望に見すぎる傾があった。」としている。(Богучарский, Указ. соч., стр. 122 所引)

4) Там же, стр. 123 所引

落は時間の問題であるから、新しい神々がはるかに危険で、この意味でより悪い。事態をこのように見るので、私はある程度までは古い神々と交友的であることができ、またしたがってロシアでも書くことができる。」<sup>1)</sup> のと述べている<sup>2)</sup> だけに、特に注目すべきものである。

「私は<前進>が期待されていることを知っている。しかしそれは、私の知る限りでは、人が自分の小金を寄進したがる財宝としてではなく、命令法 *Повелительное наклонение* としてである。人々は何物をもあなたに与えず、あなたから求めるであろう。これが私の知っているところである。」「命令法についていえば、青年達はそれを大いに期待しており、<前進> という言葉は、それがどのように落ちつこうとも、あなたがそれを発しさえすれば、大きな重みをもつであろう。私にあなたの命令法を理論的分野においてではなく、実践的分野において語られたい。」「命令法の問題について私に答えられたい。私は2つの綱領を読んだが、依然として明瞭な概念をもっていない。」<sup>3)</sup>

ミハイロフスキーによって「命令法」の欠除を指摘されたラヴロフの綱領は、当然のことながら、本国の革命的青年層を十分に満足させることができなかった。「綱領草案は十分に革命的ではないように私には思われ、私を熱中させることごとくなく、むしろ反対であった。」と П. Б. Аксельрод は後に述べている<sup>4)</sup> が、このような反応は例外ではなく、むしろ一般的なものであった。ラヴロフは綱領執筆後、当時最も有力な革命運動の組織であったチャイコフスキー派に将来における<前進> への協力を要請したが、うまく行かなかった。<sup>5)</sup> 後にチャイコフスキー派から<前進> に寄稿された唯一の論文——これは、<前進> 第3号にのった他ならぬチャイコフスキーの<ペテルブルクからの手紙> であるが——も、知識と革命の問題に対する<前進> の立場を批判するものであった。<sup>6)</sup>

ミハイロフスキーやチャイコフスキー派を始めとする本国の進歩的文筆家と革命組織

1) Там же. стр. 121 所引

2) この言葉から Masaryk はラヴロフとミハイロフスキーの政治上の立場の相違を強調しているが、彼の解釈には若干の行過ぎがあるように思われる。しかし、「ラヴロフへの協力を彼が拒否したことは、指導者としてのラヴロフの不適合性について彼が正しい判断を下していた、ことを示す。」との Masaryk の指摘は正しいものと思われる。(Masaryk, op. cit., II, 163)

3) Богучарский. Указ. соч., стр. 122, 23 所引

4) П. Б. Аксельрод. Пережитое и передуманное, I, Берлин, 1923, стр. 101

5) Cf. Meijer, op. cit., p. 127

6) この《Письмо из Петербурга》は、1874年1月1日に《前進》編集部が受けとり、ラヴロフは、《前進》1号に発表した綱領《前進!》や論文《知識と革命》に対するこの《手紙》やその他の批判を《前進》3号の《知識と革命、第2論文》で紹介、批判する際、この《手紙》を同時に発表したものであった。Лавров. Избр. соч., III に編集者(Книжник-Ветров)が附載した《Приложение: содержание трех первых томов журн. “Вперед” (1873-1874)》, стр. 402 によれば、この《手紙》でチャイコフスキーは、知識は上層階級の独占物であって、それに対する態度は慎重でなければならない、科学よりもむしろ生活の諸問題を研究しなければならない、と主張している。

なおチャイコフスキー派をラヴリストの団体とする説——これは当時からあった——は、《前進》創刊のイニシアティブがチャイコフスキー派から出たという説(例えば Kulezycki, a. a. O., II, S. 82)と共に、修正を要する、というのが研究史の現段階における結論であるが(Cf. Meijer, op. cit., p. 197), 概説的な著書の中には今なお旧説を踏襲しているものがある。(Cf. Yarmolinsky, Road to Revolution, London, 1957, p. 184; Институт истории АН СССР, Очерки истории Ленинграда, II, М.-Л., 1957, стр. 306 など)

の協力・支持が予想ほど確実でないことがわかったので、ラヴロフはチューリッヒでこれまで以上に多くの協力と支持を求めなければならなくなった。当時チューリッヒではなおラヴロフ派が多数を占めていた。Meijer は 1873 年春のチューリッヒのロシア人留学生を政治的傾向によって分類し、結論として過半数が広義のラヴロフ派であった、としている。<sup>1)</sup> 彼らは何よりも研究のために留学し、チューリッヒで政治問題に関心をもつようになった後にも研究と実践の両立を、そして、少くとも当面研究を生活の中心に置くことを望んでいたのであった。しかし、チューリッヒのロシア人コロニーの存続に致命的な打撃を与えた 1873 年 6 月 3 日（露暦 5 月 22 日）のロシア政府の有名な法令<sup>2)</sup>によって、この「広義のラヴロフ派」もツァーリズムとの対決を強いられてより革命化することになった。Meijer は、1873 年秋に始った〈人民の中へ〉の運動に、法令発布当時のチューリッヒ在留ロシア人学生 150 人余りのうち約 80 人が参加したことを確めている。<sup>3)</sup>

そして〈人民の中へ〉の運動が進むにつれて、初め多数を占めていたラヴロフ派に代って、急速にバクーニン派が優勢になって行った。「バクーニン派の中には疑いもなく精力的な人々がいたが、ラヴロフ派もまた、精力を、知識を、そして一般に、論議における優越を与えていたすべてを、誇ることができた。しかしながら、最初の会合のときから、最後の勝利は無政府主義者のものになるであろうことが明かになった。勝利は、小さな火でも火薬に点火するほど興奮した状態にあった青年たちの気分によって保証されていた。」と、関係者の 1 人は後に回想している。<sup>4)</sup> 1878 年秋に行われたこの会合では特にラヴロフの綱領が、〈前進〉第 1 号の彼の論文〈知識と革命<sup>5)</sup>〉とともに、バクーニンの〈国家と無政府〉、特にその〈付録 A〉との対比において、論議の対象となった<sup>6)</sup> のであるが、準備の必要というラヴロフの主張は多くの学生には、「革命の事業を無限に延引する<sup>7)</sup>」ように思われたのであった。チャイコフスキー派の 1 人であった Л. Э. Шишков は書いている。

「〈前進〉の第 1 号が現れた時、勤労者の間での宣伝はわれわれの中でずっと前から進められていた。われわれは完全に実践活動に没頭していたのであって、雑誌の出現はわれわれの気持にも課題にも何ら注目すべき変化をもたらさなかった。人民の間での宣伝への準備の必要を〈前進〉が非常に強く固執したことは、革命的活動への当時の青年層のあまりにも激しい押えがたい志向と矛盾した。この故にバクーニン派の出版物〈国家と革命〉は、大きな共感を以って、特に〈人民の中へ〉の熱情的な運動がすべての者をとらえていた 1874 年の春と夏に、迎えられた。」<sup>8)</sup>

当のラヴロフ自身が後 1885 年に、「私の知る限りでは、後者（バクーニン派の出版物

1) Cf. Meijer, op. cit., p. 133

2) 1874 年 1 月 1 日以降チューリッヒに学ぶ女子学生にロシアでの将来の就職と研究の途をとぎすことを決めたこの法令の結果、チューリッヒのロシア人学生は——女子学生のみならず、男子学生も一多くが、他の大学に移るか、帰国するかした。この法令の目的と詳しい内容については、Cf. Meijer, op. cit., p. 140-47

3) Meijer, op. cit., p. 156, 196, n. 73

4) Старик, Движение семидесятых годов, «Былое», 1906, X, стр. 14-15

5) この論文《Знание и революция》は Лавров, Избр. соч., II, стр. 67-122 に収められている。

6) См. Старик, Указ. ст., стр. 12, 14

7) Аксельрод, Указ. соч., стр. 111

8) Лавров, Народники, стр. 165 所引

——引用者)の方が1873～75年のロシアの青年層の間でより多くの共感をよび、<人民の中へ>のかの巨大な運動の時期に、ロシアでより広く読まれた。」<sup>1)</sup>と述べ、10年後の1895年にも「バクーニン派の文献の方が興奮した若いナロードニキの間でより多くの共感に出会い、より多く成功した。」<sup>2)</sup>と認めている。事実当時青年たちのなかには、知識の蓄積は貨幣の蓄積と同様に不道徳である、との説をなす者すらあり、一部にはラヴリズムに対する不信の空気が生れて、チューリッヒ時代のラヴロフ派でバクーニン派になる者も少なくなかったのである。<sup>3)</sup>

もっともこれはラヴリズムが完全に消滅したという意味ではない。<前進>は青年たちの間でかなり広く読まれ、<前進>第1号を読んで革命家となることを決意した後のテロリスト、H. A. モロゾフの例<sup>4)</sup>などもある。しかしこの「非合法誌<前進>により自由な言葉で同じラヴロフが書いた論文のどれ1つも、青年層に対する影響の点では、<歴史書翰>に比すべくもなかつた。」<sup>5)</sup><前進>は少なくともその最初の3号に関する限り、<sup>6)</sup>革命運動の機関誌というよりは論文集という性格の強いものであつて、<sup>7)</sup>A. Thun は、「論文は大部分死ぬほど退屈なものであり、それ故冬季に荒野の村に住んでいて他の本が手もとにないような革命家だけが、恐らくこれを完全に読み得たであろう。」<sup>8)</sup>とまでいつている。革命家になつた後にも「ラヴロフの社会主義には学者の書斎の精神がしみこんでいた」<sup>9)</sup>のであつて、「ラヴロフは雑誌の先頭に立ち、運動の先頭には立たなかつた」<sup>10)</sup>といふことができる。

1) Лавров, Избр. соч., I, стр. 83-4

2) Лавров, Народники, стр. 165

3) См. Старик, Указ. ст., стр. 14-15; Meijer, op. cit., p. 160-61

4) Cf. Ibid., p. 161

5) Старик, Указ. ст., стр. 6

6) 2号は1874年3月、3号は同年12月に出た。この間、2号発行直後にラヴロフは印刷所をロンドンに移した。これはチューリッヒのロシア人コロニーの解体のためであった。Kluge, Die russische revolutionäre Presse, S. 74 は印刷所の移転を1875年初めとしているが、これは75年1月から「前進」が隔週刊の定期出版物となっていることに関連するKlugeの誤解と考えられる。定期出版物となつてから「前進」は内容も読みやすくなり、77年まで続いた。但しラヴロフは76年末に編集部を去っている。この間の事情、特にその直接の契機になつたラヴロフ宛のС. М. Кравчинскийの手紙(1876)については、Богучарский, Указ. соч., стр. 121-131が詳しい。なおЛевин, Указ. соч., 377-8をも参照。

7) 「前進」I. П. Ш.の内容については、Лавров, Избр. соч., III, Приложение (стр. 398-403)の他、Kluczycki, a. a. O., S. 113-22; Kluge, a. a. Q., S. 72-3; Meijer, op. cit., p. 134などを見よ。

8) A. Thun, Geschichte der revolutionären Bewegung in Russland, Leipzig, 1883, S. 70

9) Витязев, Указ. ст., стр. 25

10) М. П. Сажин, Воспоминания, Москва, 1925, стр. 61

## 附録・綱領 <<前進!>> 邦訳

### 前進！ われわれの綱領

(1872年3月 — 1873年3月)

国外でロシア語の出版物を出すに当ってわれわれは、このような出版物が遭遇するすべての障害と、それが惹起する恐れのあるすべての偏見を、よく知っている。ロシア政府の最近の諸処置によってロシアの印刷物に対する圧迫が増大したことは、われわれの事業をいくらか楽にした。われわれはこのような協力に感謝の念を以って対さざるを得ない。しかしそれにもかかわらず、われわれの事業は容易ではない。

恐らくや読者はわれわれの企てを不信の念を以って注視するであろう——それは何か新しい興味あることを述べることができるのか。ゲルツェンの代え難き才能に出会うことはここでは最早できない。一般的な問題については外国の文献が存在するし、ロシアの問題については、ロシアの生活を近くで見守り、何がロシアに必要で、何がロシアに可能か、を明瞭に理解していなければならない。外国語の出版物が百回も、そしてより完全に、よりよく繰返した思想とは違った何かを、西欧の諸問題について発言することが、国外のロシア語出版物に一体できるのか。その中でロシアの問題を、ロシアで出版される雑誌がなすべきでありまたなし得るように分析するばかりでなく、理解さえすることが、可能なのか。もし国外での出版物がロシアに存在しない言論の自由を主に当にするならば、それは表現の鋭さを、スキャンダルを、ロシア帝国の領内では恭々しい釈明ずきでかろうじてふれることのできる人物や事柄に対する悪口を、専ら狙うことにならないのか。それは青年達に新たな無駄な犠牲をよびかけることにならないのか。それは実現不能な目的への志向を以って人心をさわがすことにならないのか。それは下らない内容の体裁だけの外被にならないのか。

これらの危惧や質問にわれわれは、われわれがそこから後退するつもりのないわれわれの綱領を以って答える。

正確な諸事実——これがわれわれの依拠しようとする基礎である。無条件の批判——これがわれわれの使用せんとする道具である。すべての形態の独占との、労働のための闘争——これがわれわれの自らに課する社会的目的である。ロシアの生活の諸事実は、この生活の過程を近くで見守ることのできる人達によって、その主要な中心で集められ、指摘されるであろう。外国の生活の諸事実は、それがロシアの社会の発達ないしは独占のすべての形態との闘争——われわれの意見では、現代の評論家の緊急な義務をなしている闘争——に関係する限りでだけ、われわれの綱領に入るであろう。外国の生活の諸事実と同様、一般的諸問題もそれを深く研究した人達によって解明されるであろう。新たな出版物において読者は空言や人身攻撃を期待すべきではなく、現在の社会体制の諸基礎の批判を期待すべきである。個人は、この諸基礎から情況が創り出したものである。ある皇帝が他の皇帝よりいくらか良かったり、いくらか悪かったりすることはあり得る。ある大臣が他の大臣よりもいくらか有害な影響を国に与えることはあり得る。従ってあれこれの行動方式の破滅的な影響を指摘しないわけにはいかない。しかし本質においては、有害なのは個人ではなくて、彼等の無責任、不可避免的に彼等をあれこれの行動に駆った彼等の例外的な地位である。異った社会体制の下では彼等は無害で、あるいは有益でさえ、あり得る。この故にわれわれは、個人的な悪口とか、われわれにとって重要な社会的問題に関係のないような私生活の諸特徴とかをわれわれの雑誌にのせることに断乎として反対する。あれこれの個人の活動が有害であるとしても、それは正に、それが社会に有害な程度において公けの論議に価する。この有害な個人が私生活においては誠実で人の気にそぐおうと、あるいは卑しく不真面目であろうと、これは社会にとって

## ラヴリズムの形成

の彼の有害さを、従って彼の有罪性の程度をほんの少しも変えはしない。われわれは私生活ではなくて社会的行為を裁く。私人ではなくて社会的活動家を裁く。われわれは個人ではなくて社会的原理に、社会体制の不正に敵意をもつ。

読者にとって最も重要なことは、いうまでもなく、われわれの志向している諸目的を知ること——それも、一般的な公式の形においてではなく、現在関心を惹いている様々の問題に対するこれら諸目的の特殊な関係において、知ることである。それ故われわれはここで若干の細部に立入ることにする。

われわれには現在2つの全人類的目的、一切の思考力ある人間が進歩の側か反動の側に組して参加しなければならない2つの闘争が、存在している。この闘争においては無関心であることは許されず、それに対する態度が、2次的なものとしての他のすべての問題に対する態度をいやでも決定する。この2つの闘争は人類の進歩に参加することを望む一切の個人、一切の党派、一切の国民の標語でなければならない。それは第1に、神学的世界観に対する現実的世界観の、神学的、形而上学的、理論的、道徳的なすべての偶像に対する明瞭に意識された人間的欲求の、闘争——約言すれば、宗教に対する科学の闘争である。それは第2に、生活の福利の無為の享受に対する労働の闘争、独占のすべての形態及び現象に対する人間の完全な同権の闘争、拘束力ある国家に対する自由な連合の闘争——約言すれば、最も公正な社会体制の実現をめざす闘争である。

この2つの現在の歴史的課題のうち前者の解決はすでに永くおし進められている。その上ロシアにとってこの課題は僅かの意義しか有していない。わが国で宗教的問題に関心を有するのは、われわれの出版物など恐らく読まない人達だけだからである。それ故われわれは、宗教的伝説との闘争において科学の得た最も重要な勝利に、あるいは、とくに自己の勝利の可能性についての信念を失った超自然主義者の諸党派の弱い瘡撃に、時たまふれるだけでよいであろう。第2の、最も公正な社会体制のための闘争は、これとは全く違っている。なお多くのものがその意義を全く意識していない。多くのものが正しい理論的提起の可能性を、その望ましい結末の可能性と全く同様に、否定している。この闘争は、その諸基礎が完全に現実的になって、どこに同志がおり、どこに敵がいるかを、その参加者達が明瞭に理解できる局面に入ったばかりである。最も公正な体制の実現に対して、すべての反動勢力が、古い保守的な伝説の名前で、また新たな似而非自由主義的合法性の名前で、敵対している。この体制をめざす闘争はいたる処で血の犠牲と激しい苦難をよび起している。この闘争は、それに共感するすべての人々の最も精力的な協力を要求している。この闘争に協力することがわれわれの出版物の無条件に主要な目的である。

この目的のためには、可能な活動を決定する地盤が必要であり、合目的的であるような手段の選択が必要である。地盤を構成するのはあるがままの現在の社会——上にかかげた目的への志向を許すような、この目的に敵対的なような、あるいは、それにとってどうでもよいような、所与の諸形態における現在の社会である。最も公正な体制への志向を許す現代生活の諸形態に、われわれは依拠し、この志向の進歩的意味における発達の可能性を指示するであろう。敵対的な社会諸形態には、われわれは無条件に敵対的に対するであろう。本質的にはどうでもよいが、所与の状況次第で進歩的あるいは退歩的たり得るすべてのものには、われわれは、それがわれわれの問題と肯定的あるいは否定的に相交る程度に正に応じて、個々の場合に友好的あるいは敵対的に対するであろう。われわれの目的の勝利が一挙には実現され得ないこと、そのためには準備が、所与の時点において可能なことの明瞭な理解が、必要なことをわれわれは知っている。正にこの可能事をわれわれは常に念頭に置くであろう。僅かの進歩的現象の中にわれわれは、それを更に一層の進歩の地盤とする可能性を指示すべく努めるであろう。将来の広汎な諸目的のためわれわれは、現在ののみじめな体制の中にある可能な諸手段を指示すべく努めるであろう。

真理の普及のための手段では嘘言はあり得ない。公正の実現のための手段では、個人の搾取も権威的支配もあり得ない。怠惰な享楽に対する勝利の手段では、不勞所得たる財産の暴力的奪取、享樂する可

能性の、ある人から他の人への移行は、あり得ない。虚言を、強制を、闘争の道具の取上げを、敵に対して一時的に使用しなければならないような、不可避的な闘争条件は存在する。しかし、極端なかつ一時的な必要を除いて、これらの手段は、そのためにこれらの手段が定められている目的そのものにとって有害である。共通の事業のための同志、仲間、同盟者の間では、虚言は罪であり、幻想の意識的普及は事業に対する裏切りであり、強制は許されず、搾取と私的制裁はふとどきである。目的は手段を正当化すると主張する人達は、目的そのものを傷つける手段を除いて、というごく単純なわかりきったことによる自己の方式の制限を常に意識していなければならない。われわれは、合目的的ならざる手段、すなわちその可能性が極度に推測的な手段とか、所与の時点では役に立つが活動の綱領にもち込まれるならば不可避的に益よりは害をより多くもたらすような手段とか、最後に、その使用が原則的にわれわれの志向の目的そのものと矛盾する手段とか、を使用することを無条件に拒否する。

上述によって、現代の様々の問題、党派、社会形態及び社会活動家に対するわれわれの態度は明らかになる。

宗教的、社会的、神学的要素はわれわれに対して無条件に敵対的である。われわれは批判に依拠し、現実的思考の勝利、現実的欲求の充足を志向する。啓示ないし観念的形而上学に依拠する正党派及び異端派の様々の宗派とわれわれの間には、何ら共通のものがない。超自然主義的、神秘主義的原理を、われわれはそのニュアンスのどの1つにおいても認めない。

社会的問題はわれわれにとって1次的な問題である。われわれはその中に現在の最も重要な課題、よりよき将来の唯一の可能性をみる。自由な連合への労働者大多数の結合、総体的で強力な行動のためのこの結合の組織、この組織の勝利、そして現在の産業的—合法的な国家と身分の崩壊の上に新たな社会体制を樹立すること、これらの中にわれわれはこの将来を実現する唯一の手段をみる。この実現の可能な手段は、現在の時点においてロシアにとってとヨーロッパにとってで異っているが、ヨーロッパそのものにおいてかなり重要な意見の不一致が、同一の共通目的への志向におけるその一様な誠実さを疑ういかなる根拠をもわれわれが有していない諸党派を、この点で相互に敵対させている。綱領の実現方法についてのこの見解の相違にもかかわらず、綱領そのものはその諸原則がすでに決定されている。それは、ヨーロッパにおける労働者プロレタリアートの共通の諸志向を表現した若干の大会の決定において、表明された。それは、多くの点で意見を異にしながらも、現在の合法的—産業的体制との労働者のための闘争において一致しているすべてのニュアンスの意見の機関誌や小冊子において、表明された。それはわれわれロシア人活動家の農民のためのすべての志向の基礎に横たわっている。よりよき社会体制の樹立を真面目に欲しているものは誰でもこの綱領に組することができるし、またそうすべきであり、われわれもまたこれに組する。この綱領の諸原則は、ロシアの農村労働者は西欧の工場労働者とは違った組織によってロシア社会の改造に進むべきである、と考えている人達にとっても、ヨーロッパとアメリカの労働者階級にとっての強力な中央機関の必要、現在の政治闘争への労働者の参加の重要性を特に強調する人達にとっても、小グループの自主性、現代のすべての政治綱領からの労働者の政治綱領の峻別を特に精力的に支持する人達にとっても、等しく本質的である。これらの見解はすべて、新たな社会体制において労働者に完全な主権を提供するために（多少とも中央集権的、多少とも連邦主義的な）総体的行動を必要とする点では一致している。これらはすべて、軍隊、警察、一面的合法性、国家組織の巨大な力に依拠している共通の敵に対する共同行動の決意においては一致している。これらの論争点におけるわれわれ各人の個人的見解がどうあろうと、われわれはそれをわれわれの出版物の特徴的旗印にすることを決意はできない。われわれの旗印は共通の目的であって、部分的な手段ではない。われわれは、労働者がその敵との闘争で勝つことを望むすべての人々に、これらの論争点を自己の観点から明らかにするためわれわれに加わるようにすすめる。勿論その際われわれは、反対意見の者に対する個人攻撃——共通の目的と共通の敵にかんがみ、考えることさえいけない攻撃——ばかりでなく、より

## ラヴリズムの形成

よき将来の実現の手段について筆者の見解と一致しないどれかの党派の誠実さに対する疑いそのものをも断乎排する。われわれ各人は個人的には誤つかも知れず、各グループはその綱領の細部において思い違いをするかも知れない。しかし敵との同盟だけが、現在の合法的＝産業的社会とわれわれすべての行っている闘争における裏切りとみなされ得るのであって、われわれは、反対者の思い違いを、共通の目的への本当の手段とわれわれに思われるものと同じ程度に誠実なものとみなさない権利をもっていない。意見の分れている問題点を相互に明らかにしよう。しかし何よりも、われわれが同一の目的と同一の敵をもっていることを認めよう。協力して行動しよう。ここにわれわれの力がある。あれこれの方法による総合的な労働運動の組織の途だけがわれわれの目的に通ずることを理解しよう。共通の闘争の他の手段はなお存在せず、他方この方法は可能であり、強力であって、将来における最も広汎な発展を許容する。敵の強力な組織に対して単独の闘争は無意味で合目的でない。よりよき将来を志向する者は、その目的にとっていかなる手段が可能であるか、を明瞭に認識しなければならない。

政治的問題はわれわれにとって、社会的問題及び特に経済的問題に従属せしめられる。現在あるがままの諸国家は労働運動に敵対的であり、すべて最終的には解体せしめられて、最も広汎な個人の自由が同権の諸個人間の連帯性と共通の目的のための広汎な協同とを妨げないような新たな社会体制に地位を譲らなければならない。しかしこれは遠い将来の社会的理想——絶えず念頭に置かなければならないがしかし、今日でも明日でもないその実現の可能性の期待によって自らを欺くことなしに、そうしなければならぬ社会的理想である。

国家的強制の一切の痕跡がなくなる将来の自由な共同生活のこの理想と、複雑な合法的形式主義や広汎な行政網によって住民の大多数を圧迫している世界の中央集権的諸国家との間には、理論的に提起され、またはそのための実践的実現の多少とも成功せる試が存在した、完全に一連の仲介的政治諸形態が横たわっており、現在の国家性とのこれら諸形態の闘争において、遠い将来の勝利が準備されている。これらの政治的綱領の多様性にもかかわらず、われわれはそれらの中で注意を専ら最も本質的なものにむける。すなわち、諸個人の集団形成は法的な地域の区別や生得の国籍の違いに左右されることが次第に少くなり、搾取者と被搾取者の経済的対立の要素と、保守派と進歩派の対立の精神的要素が次第に優越しつつある。国家的で中央集権的な原理は、ますますより小さい社会的単位の自由な連合の原則に次第に地歩を譲っている。諸個人の人為的で偶然的な集団形成に、諸個人の本質的で意識的な対立がとって代ること、現在の合法的諸国家の中央集権の原則の代りに、コンミュンや自由な結合の小グループにおける自治の原則が増大すること、正にこうしたことの中に、われわれの意見では、人類の政治的進歩は存している。諸々の政党や政治綱領の闘争において、われわれは常に国家性に代る自由な結合の要素の拡大に注意をむけ、これらの理論や綱領に対して、それらが同権の諸個人の将来の自由な結合に接近して共同生活のこの形態を準備すればするだけ、より好意的な態度をとり、現在の合法的＝産業的中央集権体制の伝統を維持すればするだけ、より敵対的な態度をとるであろう。

現在の中央集権的政治綱領はすべてわれわれに真向うから敵対的である。多少とも自由主義的性格の立憲的理想をもったすべての政党、中央集権的ブルジョア帝国を中央集権的ブルジョア共和国に代え、現在の領土配分を違った中心と違った法律をもった違った配分に代える一切の試み——これはすべてその基本的体制においてわれわれに敵対的であり、その現象においてわれわれには関心がない。ブルジョア社会の歴史的生活のこれらの事実は、労働組合の組織と社会的闘争の諸原則とにこれがどの程度広汎な影響を保障するかに応じて、われわれにとって良かったり、悪かったりし得る。思想と言論の自由、結社の自由、下層階級の統治への参加、教育の普及は無条件にこれらの原則を助けるので、われわれはそれらを、誰がその反対者であろうとも、到るところで支持するであろう。しかしわれわれはわれわれの同志達に、政治的綱領のこれらの要素を、これらを自分達の綱領に持込む自由主義的諸政党との同盟に入ることなしに、支持し利用するように助言する。われわれは若干の点で彼等と一致することが

できる。しかしわれわれの目的は完全に異っている。ヨーロッパとアメリカの現在の政治運動への労働者の参加の問題は、先に述べたように、論争のあるままにしておく。労働者階級（農民及び工場労働者）が政治的影響力を自分達の手にし得る国においては、彼等は現存の政治諸形態を自らの事業のために利用し、しかる後に直接の立法で社会を改造する方が恐らく有効である、と考える人々の協力をわれわれは喜んで受入れるであろう。この方法を合目的的ではないとし、労働者は現在の国家体制と何ら共通のものをもつべきでなく、それに自分達の自主的な組織——しかるべき勢力に達した後、所与の時点で現存秩序全体を社会革命の方法で顛覆してこの秩序を新しい秩序に代える組織——を対置すべきである、と説く人々の助力をもわれわれは拒否しない。われわれはただ前者の注意を、労働者は、政党的ブルジョア的闘争形態に参加する時、自己の綱領の一部を譲って議会のおしゃべり屋の形式的で空虚な弁論に惹きつけられる危険が最も強いという事情へ、更に、労働者階級の政治的支配は現存の国家諸形態においては若干の国においてのみ可能で、他の国々では社会革命の方途でその目的に進むことが彼等にとって不可避である、ということへ、向けるであろう。われわれは他方、後者の注意を、自己の目的達成のために常習的に革命の途をえらぶ党派は勝利を組織する義務を自らに課する、ということへ向けるであろう。

民族問題は、われわれの考えでは、社会的闘争の重要な諸課題の前では完全に消滅すべきである。民族はそれぞれの社会過程にとって完全に現実的で不可避的な基盤である。一定の言語を使用し、一定の文化を創りあげている社会に対して、一定の場所で働きかけなければならない。これを考慮しなければ、社会活動の目的は全く抽象的な意義をもつようになり、決して実現されないであろう。様々な場所で様々な民族にとって、所与の瞬間の諸課題は異なり得る。しかし各民族は、全人類の諸目的への共通の志向において一致しつつ、自己の課題を果すべきである。宗教的要素に対する闘争、教会及び宗派組織との一切の結合の拒否、「国際労働者協会」の組織の拡大、自治的共同体ないし自由な結合の連合への志向——こうした点においてすべての民族は協力して働くことができ、また働くべきであって、この共通の仕事には障害はない。この仕事にとっては国境、言語、伝統は存在しない。人々と彼等全部に共通の諸目的とがあるだけである。これらの原理は不可避的に、思考力ある人々の習慣においてすらなおあまりにもしばしば現れる民族的区別、対立、敵対との決定的な闘争を要求する。諸人種や諸民族の競争への一切の刺戟は、社会的問題の国際性と、社会の被抑圧階級の抑圧者に対する闘争の一体性の真向うからの拒否である。

しかし共通の諸目的のこの一体性にもかかわらず、地方的課題は、上に述べた如く、歴史的発達の多様性の結果極めて様々であり得る。勿論われわれにとって最も重要なのは、われわれの祖国のためのこれら諸課題の闡明である。以上にかんがみわれわれは、ロシア人が、上述の全人類の諸課題の他に、それらに従属しそれらの二次的現象あるいはそれらの将来の解決のための手段として、自己の諸課題を有していること認めなければならず、以下それらを取扱うことにする。

ロシア人にとって、ロシアの住民大多数の将来性が現代の共通の諸課題が指示している意味で発達し得る特殊な地盤は、共同体の土地所有者をもった農民層である。土地の共同体による耕作とその生産物の共同体的利用の意味においてわれわれの共同体を発達させること、ミールの寄合をロシアの社会体制の基本的な政治的要素とすること、私有財産を共同体財産の中に吸収すること、農民に教育と彼の社会的必要物の理解——この理解なしには農民は自己の合法的諸権利を、それがいかに広汎であろうとも、享受することが決してできず、また最も成功した変革の際にすら、少数者の搾取から決して逃れないであろう——とを与えること、これこそが、自己の祖国の進歩を欲する一切のロシア人の助力すべき特殊ロシア的な諸目的である。

しかしいかなる手段によってこれらの目的は達成され得るか。この考えに附随して思い浮ぶ様々な方途のうち、いかなる方途が提起されている目的そのものに矛盾しないか。いかなる方途が、事業そのも

## ラヴリズムの形成

のに生命を捧げる本当の真剣な決意の代りに、事業に関する無益なおしゃべりをもたらす危険を提示するか、いかなる方途が、古い諸形態を、恐らくこれより多少はましであるがロシアの純人民的な諸要求にはやはり無縁な、他の諸形態を以って代える危険を提示するか、いかなる方途が成功の低い蓋然性を提示するにすぎず、どこで問題の成功的解決に達することをむしろ期待できるか。

勿論ここでも見解の多様性がかかる問題に対する解答の多様性の形で表現される。われわれは《前進》を、すべてのニュアンスのロシアの急進的=社会主義的思想を包含する機関誌にできたらしたい。ロシアの在外印刷物の他の機関誌の欠陥りがどのニュアンスのロシアの反対派にも発言を許してはいないから。しかしロシアにおける政治思想育成の弱さにかんがみ、有害ないし極度に疑わしいとわれわれの考える傾向やニュアンスへのかかる態度は、一切のロシア人にとって最も身近でかつ重要な当の問題における無頓着さや綱領の不安定と受取られる可能性がある。それ故われわれは、われわれに参加を約束した協力者と通信者の多数の意見に最も近い急進的=社会主義的意見だけを、われわれの雑誌にのせざるを得ない。目的においてわれわれと一致するものなら、他のニュアンスの論文でもこれをのせることをわれわれは拒否しないが、それらには、よりよいものへの変革のためにロシアで可能な手段について《前進》の周りに結集する大部分の人がもっている見解を絶えず読者に明らかにするような、論争的註釈ないし一般的反論を附加えるであろう。

ロシア社会の改造は、人民の福祉の目的をもつばかりではなく、人民のためばかりではなく、人民によって行われるべきである、との主張をわれわれは第一にかかげる。人民にはより発達した少数者の諸グループの創り出した革命思想を押しつけることができ、社会主義者=革命家は、成功せる突進によって中央政府を倒してから、そのあとに新しい体制を樹立して、この体制を、これに対して準備されていた大衆を保護して、立法手段によって実施することができる、という古い考えを、今日のロシアの活動家はすてるべきである、とわれわれは考える。われわれは古い強制権力に代る新しい強制権力を、その源泉の如何を問はず、欲しない。われわれがその実現に協力する決意をしたロシア社会の将来の体制は、多数者自身が意識し理解したその要求を実現しなければならない。多数者がほとんど文盲で準備も出来ていないので、われわれはわれわれの言葉で直接彼等にうたえることはできない。われわれがわれわれの言葉でうたえるのは、ロシアの教養ある少数者のうち、将来が人民に属していること、人民の搾取が何らかの方法で消滅すべきこと、少数者には人民の列伍に加わるか、彼等に可能な一切の進歩的活動を拒否するかしかないこと、を理解している部分である。自分達の理念を多数者への施恩として押しつけるのではなく、人民の真の欲求を、この欲求の最もよい充足手段を、そして、人民の中に存しながら彼等に意識されておらず、そのため彼等の敵を抑圧して自らのためによりよい状態を獲得するための事業に使用され得ないでいる力を、人民に闡明する義務が、ロシアの教養ある少数者のこの部分にはある。人民の福祉を望むものが志向すべきは、成功する革命の助けで権力となって、指導者達にしか明白でない目的へ人民を率いて行くことではなく、人民の中に意識的な目的設定、これら目的への意識的志向をよび起して、社会的変革の瞬間が来る時にこれら社会的志向の遂行者以上にはならないことである。

教養ある階級の地位が人民運動に際してわが祖国におけるほど困難なところはどこにもない。わが国では、階級間の区別が、個人の富の多寡ばかりでなく、文化生活のすべての細かい事柄、生活環境のすべての部分的な事柄、おびただしい日常の習慣によって決定されている。後者は最も目につきやすく、逃れることが最も困難で、将来における同一の目的を社会に設定している人々の接近を最も妨げるものである。古い旦那気質や役人根性の呪うべき伝統が、ロシアで教養ある階級の生活を送っている一切の者の上にのしかかっている。この伝統はこの階級の言動に対する不信を人民に吹き込んでおり、この不

1) 当時(1873年)《Колокол》はすでに刊行されておらず、《Народное дело》も廃刊になっていた。他方バクーニン派の機関誌刊行は計画だけで終り、トカチョフの《Набат》はなお刊行されていなかった。

信をなくすには、人民が文化的習慣の些事によって彼等から遠去けられている者を仲間と認めるには、多くの個人的努力が必要である。

人民への接近のこの困難性が正に、ロシアのよりよき将来を実現すべき変革の準備のための社会的活動におけるあれこれの方法の可能性と合目的性に関して多様な見解を生ぜしめている。これらの見解がいかなるものであろうと、われわれはそれらにおいて次の諸点を本質的かつ不変なものとみなす——厳しくかつ激しい個人的準備によってはじめて、人民の間での有益な活動の可能性を自らのうちに創りあげることができる。

個人としての自己に対する信頼を人民にもたせた後にはじめて、このような活動の必要な諸条件を創ることができる。

人民にその必要事を闡明し、明白に理解された諸目的の達成のための自主的かつ意識的活動へ人民を準備してはじめて、ロシアのよりよき将来性の現在における準備において本当に役に立つ参加者と自任することができる。

歴史的出来事の流れが自ら変革の瞬間とそれに対するロシア人民の準備完了を指示する時はじめて、この変革の実行を人民によびかける権利があると自任することができる。

これらの論点の本質性と不変性に関するわれわれの見解に組するロシア人だけをわれわれは、協力者、同盟者、同志とみなす。われわれはこれらの主張を認める論文だけを、それらの本質そのものからいってそれらに論争的態度をとることなしに、掲載するであろう。われわれはわれわれに共感する人々に、これらの主張をわれわれの出版物であらゆる側面から展開・闡明するようよびかけ、そしてこれらの主張をたえず練りあげるように努力する。われわれはこれらの主張に対する反論の掲載を無条件には拒否しない。しかしこうした反論は、かりにわれわれに提供されるなら、われわれに出来る限りもう一度これらの主張を擁護する手がかりとしてわれわれに役立つであろう。

然り、われわれは、わが国の人民のために役に立つ活動家たらんとする何人にとっても、思想における、また生活、知識、実践的手腕における厳しい個人的準備は不可欠かつ義務的であると考え。自己の全時間を知識の些事に捧げる特殊な博識が意識的な社会的活動の意味において無に等しいのと全く同様、一切の将来の社会的変革の堅固さのためには、人類における一切の進歩の正しい実現のためには、科学が——世界の総体的解を闡明し、現実的世界観、個人の批判的能力をつくりあげ、かつ人類の全将来性を含む社会学的諸問題の正しい提起のための唯一の支柱となる科学が、本質的で重要である。新たな社会体制の樹立が提起する困難で複雑な諸課題を、推測や本能で解決できると想像する者は、課題がそのすべての実践的不可避性を以って彼の前に立現れる瞬間に、避け難い敗北を自らに準備する。彼は、彼の力が最も必要とされるその時に、役に立たない活動家であることがわかる。彼は思想の分野で彼よりもよく準備されたいんちき師や利己主義者に手だまにとられる。他方もし彼が思想の分野における厳格で意識的な準備への敵意を意図的に説くならば、彼はよりよく準備された敵との闘いにおいて自分の仲間や同盟者を破滅させる準備をする。彼は、その瞬時の成功が必ずや弾圧を招く将来なき革命へ人民を駆る準備をする。人民の党にはその場合可能な勝利の唯一の手段である知識が足りないであろうから。われわれはこの考えを特別な論文で展開することにするが、ここでこれを論じたのは、他のすべての点ではその活動綱領にわれわれが完全に共感できる若干の小さなロシア人青年サークルに最近認められる知的発達の意義の否定への病的傾向を考えてである。将来の社会的変革の困難な諸課題の解決を予想した体系的無学の教説は、われわれの出版物において最も決定的な反論をこうむるであろう。

1) 《前進》1号所載の《Знание и революция》のこと。Старик, Указ. ст., стр. 14によれば、この《知識と革命》におけるラヴロフの主張は、当時青年達の間で、綱領《前進!》におけるよりも政治的に後退したものと考えられ、これがラヴロフに対する青年達の支持の後退の一因ともなった。

## ラヴリズムの形成

しかしロシアの教養ある階級の者は人民の間における有益な活動の可能性のために理論的に自らを準備しなければならないだけではない。彼は生活の面でもそのための準備をしなければならない。彼は生活環境の習慣がロシアの諸階級の間においた峻別を自分自身と自分の周りにおいて和らげるべく、すべての努力を傾けるべきである。彼は人民と生活することができるべきであり、人民と語らって人民を理解し、一般的な問題ばかりでなく日常の細かい問題でも人民に共感することを学ぶべきである。われわれはこの準備を第一のものとは比較にならぬほど困難なものと考え、われわれに共感していてかつこの準備の困難を克服できたすべての人々に、生活の体験から彼等の引出した資料についての手記と指示をわれわれに送るよう求める。われわれはこれらの手記を、それらがロシア政府の手に新たな武器を与える危険をもたらさない限り、掲載するであろうが、それらがわれわれの出版物の他にも役に立つよう努めるであろう。

第二の点はすでに上に述べたし、その必要性は自ら明白であると考えるので、これにはここではふれないことにするが、この点でも、教養ある階級の者はいかにして人民の信頼を獲得すべきか、ということに現れて来る問題の解決の極度の困難が除去された事実資料の指示を、われわれはわれわれの出版物にのせるべく努めるであろう。人民に信頼されなかった者は、人民に自己の考えを押しつけることができるだけで、人民そのものの中に彼に対する意識的共感と彼の考えを実行に移す決意をよび起すことは決してできないであろう。

教養ある階級の人の人民の間における行動方式そのものが問題になる時こそ、最大の意見の多様性が現れる。その際には、社会的変革の目的については一致しながらその実現については異った手段を要求する人々が、しばしば完全に意見を異にする。この場合にはわれわれの出版物は、上に述べた諸主張と矛盾しない見解だけを論争をつけずに掲載することができると思われる。

革命を人為的に惹起することはできない。革命は個人的意志、小グループの活動の所産ではなくて、非常に多くの複雑な歴史的過程の所産であるから、革命を人為的に惹起そうとする試みといったものは、一切の社会的激動が、その際最大の犠牲を生むあわれた多数者にこそ重くのしかかることを知っている者の目には、とても正当化され得ないであろう。しかし人為的に革命を惹起す必要は、ありとあらゆる政府が相競って革命のために材料を提供したので、今日まで差迫ったものではなかったし、諸人民の苦難の増大は、彼等が無謀な革命的企てに突進したことよりも、彼等が古くなった体制に耐え、またはそれに対して十分決定的に反乱を起さなかったことに、はるかに多く由来していた。同様に留意すべきは、一切の人民的な革命的企ては、不成功のものでも、歴史の上で社会の有益な教化手段である、ということである。すなわちほら吹き達が正義の人々から分れ、諸党派の標語がずっと明確なものになり、これら党派の見せかけの提携が崩れ、社会の中に同時に発生しながら重要性の度合を非常に異にする様々の問題のうちから社会の本当の諸課題がより明確に分出し、どの歴史的経験も将来のための有益な教訓になる。しかし、革命の害と益がどうあると、事実上歴史は不可避的な宿命をもって革命へと進んでいる。事柄の流れ全体が社会的激動を準備している。保守主義者達はこれを予防しようとしているが無駄であり、彼等は、それに強く抵抗したり、不可避的なものに適時譲歩したりして、それを多少とも困難にすることができるだけである。革命家達は、それを惹起すことはできないが、自らの正しい準備、自らの綱領の立派な完成、所与の時点における適宜な活動によって、不可避的な変革を容易にし、速めることはできる。彼等は自己の無知と自己の誤謬によってそれを困難にすることもできる。われわれは人為的にロシアに革命運動を惹起そうとは考えていないが、最近のロシア政府の活動も、この政府がその活動家を引出しているサークルの組成も、わが祖国に深刻な激動と不可避的な変革を準備しないのに十分な国家的理解を政府が有している、という希望を少しももたせない。恐らくや政府は革命的企てを起させるであろう——それが、モスクワとペテルブルクの中央集権の全時期を通じて下層民の間に、また全人類的理念の影響がわが社会に及ぶや否や教養ある階級の間、常に動揺を起させたのと

同様に、これらの革命は成功しないかも知れないし、真の人民的綱領には有害なサークルや党派を社会の頂点に浮びあがらせるかも知れないが、この綱領そのものの実現、あるいは少なくとも闡明に協力することもあり得る。これらの可能性を考慮する時、人民の福祉の側に立つ人々のなすべきことは、ぎりぎりの可能性がより確実になるように自らの全力を傾けること、つまり、革命的企てが起る時にその成功の諸条件を準備すること、人民的綱領に有害な諸党派の成功に対抗すること、志向すべき諸目的とこれら目的の実現に最も適した手段との人民の間における闡明にあらゆる方法で協力すること、である。

人民革命が必然的になる時、歴史的諸事件の流れと政府の行動によってそれが招来される時、その成功を準備すること、——これが、人民の福祉を望む一切の者にとって、われわれが上に述べた人民的綱領に本当に献身している一切の者にとって義務的であるとわれわれの考える最も近い活動目標である。

しかし、教養ある階級に属する人間は如何にしてこの成功を準備することができるか。

第一に彼は、基礎的知識で自らを武装し、かつ人民的諸欲求をわが物としてから、現代ロシアの国家体制への参加を一切拒否して、人民の中へ入ることができる。彼は、それができさえすれば下級労働者の中に、日々の生存のために苦しみ鬨っている人々の中に位置して、自らのすべての知的準備を人民の事業に捧げ、自己の兄弟＝勤労者達に、彼等が権利を有している事柄、彼等が自らの人間的尊厳の名において志向する義務のある事柄、最後に、彼等が強く求めて自らの意志の実現のために団結することができさえすれば達成できる事柄を闡明するのに、この知的準備を使うであろう。極めて困難ではあるが、その困難性が克服できるなら著しく有益であるとわれわれのみならず、このような種類の活動の諸条件が事細かに展開される一切の論文を、われわれは喜んで受入れるであろうし、またこうした活動のできるだけの普及をみたいものと思っている。勿論われわれが印刷できるのは、ロシアにおける事業そのものに害を与えないものだけである。

第二に、ロシアにおける人民革命の準備は合法的諸手段の助けをかりて遂行できる。この場合にも、合法性なる用語の多様性の故に、われわれはわれわれの考えの闡明のために若干立入った説明をしなければならない。

ロシアでは一切の立憲的要素が欠けているので、皇帝の無制限の専制ないし社会に対する行政機関の無責任に対する一切の反対は、国事犯であって、合法的であり得ない。従ってロシアにおいては合法的反対は、ヨーロッパでこの言葉に本来的な意味では、問題にさえなり得ない。ロシアで社会的及び政治的変革を合法的に準備することはできない。この方向を明らかにした一切の行動、一切の言論、一切の思想はそれ自体違法であるから、無制限の専制は自分自身でだけ合法的に自己の存在を拒否できるか、それとも革命的方法によって破壊さるべきである。あるがままのロシア帝国を認めて社会的変革がこの帝国の基礎の上で可能であると考える合法主義者達は、何をしゃべっているのか自分でわからないのである。

合法主義はこれと違った風に理解することができる。合法的に存在している社会統治の諸機関が社会的変動の瞬間に、現在はそれに属していない権力を握り、自己の国家的機能を拡大し、二次的、三次的要素から一与に、皇帝の専制が跪拝するか立去るかする指導的中心になることがあり得、そしてその時には、無制約な皇帝の官房からゼムスキー・ソボルないし元老院の大広間への立法権の移行の方法で、立憲的・議会制的秩序をもった合法的変革が起り得る。勿論この途は、わが国の立憲主義者達の想像力によって西欧の議会・立法院などを模範として最もよいものとして描かれている。国家的変動の際立憲的党派は多分この種の変革の試みを以って登場するであろう。立憲的党派は現在すでにロシアにおいて、社会での地位、資本、ジャーナリズムの名声、ゼムストヴォや法曹会での勢力、行政上の経験をもった人々の、特に広汎でもまた決して一様でもないがやはり注意に値するグループをなしている。この党派は深刻な国家的困難が起り次第重要な役割を果すことを欲しており、事実、これに、より人民的な綱領とこの綱領の人民によるより明確な意識を対置しなければ、恐らくこの役割を果すであろう。

## ラヴリズムの形成

われわれはこれらの合法的革命家達に共鳴することができず、彼等の綱領をわれわれの出版物にのせることはできない。彼等があとを追っているヨーロッパの模範はすべて、本質的には結局人民に対して敵対的であったし、彼等は立憲体制の詳細についての雄弁な討議において多数者の本質的な経済的要求を常に忘れて多数者に結局理解されなかったし、最後に、このような合法的変革は人民に由来して人民自身によって行われる変革ではなくて、高級官僚または有力な演説家のグループによって人民におしつけられる変革であろうから。

最も基本的なわれわれの諸要求からの結論として、われわれはゼムスキー・ソボルを、それが、大部分農民の代表から——農民の諸要求と一致する社会改造、すなわち経済的と同時に政治的であり、かつ経済的課題が政治的形態を制約するような社会改造を目的で農民によって意識的に選出されたその代表から成っているような時にだけ、ロシアの社会的変革の正当な機関で活動家と認めるであろう。現在の状態は、短期間にゼムストヴォが本当に多数者の利益の代表者になる、といった希望を少しも与えていない。反対に、ゼムストヴォが真に人民的な機関になる力のないことが年毎に明らかになっている。農民的要素の強化によってそれを立上らせるのには、直接の人民蜂起による成功する革命の準備よりも、恐らくより多くの努力が必要とされるであろう。この故にわれわれは望まれているゼムスキー・ソボルの合法的＝革命的行動によるロシアでの変革の準備をほめかす可能性のある論文は、極度の注意と不可避的な釈明つきでだけのせることができる。われわれはいかなる党派とでも一緒に、思想・言論・結社の自由、一切の誠実な立憲的綱領のこれらの要素を護るであろう。われわれは、これらが一切の強制的な国家的きずなの強化を内包し、かつわれわれの綱領の発展のために好都合な地盤をわれわれに提供するが故に、これらを護るであろう。しかしヨーロッパを模範にしたロシアの立憲的党派をわれわれは一般に、ロシアで諸党派の深刻な衝突の可能性が生じ次第にわれわれが闘わなければならない直接の敵とみる。現在すでにわれわれは、ロシアの人民のよりよき将来性にとってそれだけが合理的なものとなれわれの考える諸論点を、われわれの出版物で絶えず彼等の綱領に対置するであろう。これらの論点は、農民の利益への他のすべての階級の利益の従属、ロシアの国家及び社会体制の基本的要素としての自治的な世俗的共同体という一つの政治的課題において統一されるものである。われわれは、ロシアの立憲主義者達がこの課題をその政治的綱領の冒頭に置くことを期待する。

多くの者は合法主義という言葉をもっと違った風に理解している。あるがままの国家体制を認めず、その中で確立している諸関係の合法的諸形態に将来の社会秩序のための指導権を認めず、現体制の合法的諸機関を将来の革命の可能な道具と認めさせずに、彼等は、将来の変革に協力するのにより好都合ならんがために現在の社会体制の中に地位を占める可能性を認めている。われわれはこの可能性を全く拒否するつもりはないが、それを大きな不信を以てみることを認めざるを得ない。多少ともよい給与を伴う地位にあって社会に役立つという仮面の下に、地位と給与を有して同時に先駆的な人々の間で進歩的活動家の名声を享受するという、ごくありきたりの希望があまりにもしばしばかくされて来たからである。ここで最も重要なことは言行不一致にならないこと、実際、合法的体制の中で占めている地位が、顕微鏡的福祉を狙う小さな活動ではなくて、望まれている変革の準備に役立つことである。自分が影響力をもち得る人々の境遇の僅な改善のためにお役所での自分の地位を利用する者は、進歩的変革を準備しない。反対に彼は、社会にある不満を一時的かつ地方的に緩和することによって、それだけが人民的綱領に強固な勝利を提供し得るところの人民的運動の統一を弱める。自らの行く顕微鏡的福祉についての観念で自らの良心を鎮めることによって彼は、人民により広汎な悪と闘う彼等の権利、この悪と闘う彼等の義務、欲しささえすればこの悪を制王できる彼等の力を闡明する自己の義務に対して目をふさぐ。役所での合法的地位は、ある場合には人民との交渉を実際容易にするかも知れず、人民にその友と同志をよりよく知ることを許すかも知れない。しかしそれが進歩的意義をもつのは、人民の間での発展する宣伝の手段として、すなわち現在の社会悪を惹起している経済及び政治体制との闘争の権利・義

務・可能性の宣伝手段として役立つ時だけである。このような合法的地位にあって人民の中で上述の信頼を獲得することは極度に困難である。しかしかりにそれが獲得できるなら、合法主義のこのような理解はわれわれの綱領と矛盾せず、従ってわれわれは、将来の変革の準備のためのこの方法による活動の効用を展開する論文をのせる用意がある。

しかし次のような読者が、しかも真面目な読者が、あるかも知れない。実際に変革は不可避なのか。ロシアにとってよりよき将来は本当に人民的爆発だけから期待すべきなのか。これは困難な流血を伴う爆発たらざるを得ないのだが、その無制限の専制を早晩譲らなければならない政府は、これをおしゃべりの立憲主義者に渡す代りに本当のロシアの人民に譲ることを果してよしとしないであろうか。おしゃべりの立憲主義者達はどこでもまた常に能力のない利己主義者、貨幣に貧慾な人民の搾取者であったことがわかっているのだが、ロシアの支配階級は、議会主義が社会的問題を解決せず、人民におしつけられた政治的憲法は、いかに精妙なものでも、経済的の傷を治さず、到るところで起っている社会的敵意を鎮めることができないでいる、というヨーロッパの実例によって果して学ばなかったであろうか。彼等は、人民と融合して、流血の社会的革命を防止することを果して欲しないであろうか。いかなる輝かしい歴史も過去においては彼等をこの人民から区別していないのだが、譲歩と自己犠牲の平和的方法でロシアがよりよき社会的将来の目的へ、またその前に置かれている綱領の実現へ進むことを希望して果してならないのだろうか。

われわれもこうした読者の素朴な期待を信じたい。このような空想的な将来を当にしたい。しかし歴史の鉄の教訓の証明するところでは、自己犠牲のこのような美拳を権力は未だかつて提示したことがなく、支配階級は実行したことがない。かりにわれわれが問題のこのような解決へのせめて試みを見るならば、われわれは喜んで和解と過去の亡却を説くであろう。だが今は……われわれはこの提案を結構な夢として扱い、われわれに共感する人々に次のような悲しい言葉を以って呼びかけなければならない。

ロシアのよりよき将来のために革命の途が不可避であることはほとんど間違いない。そのための好期がいつ来るかは何人もいうことができない。しかしそれは、ロシアの国家的機能全部が一箇所、一人物に集中されればされるほど、それだけ思いがけずに来る可能性がある。知的発達、生活体験、強固な性格の涵養によってこの好期へ自らを準備せよ。ロシアの人民にその真の欲求、その永遠の権利、その厳しい義務、その強力な力を説明することによって、彼等をこの好期へ準備せよ。次いで、好期が到来した時、これらの権利の獲得、これらの義務の逆行、この力の発展に向って人民と共に進め。前進せよ、それが諸君にとっていかに骨が折れようと、人民にとっていかに骨が折れようと。この将来の代価がいかに程であろうと、それは獲得さるべきである。

これが、ロシアの国内問題のためのわれわれの綱領である。

しかし綱領にとっては国外問題も存在している。それは何よりもスラヴ問題であって、これについてわれわれは完全に明確な綱領を設ける。

スラヴ諸民族はゲルマン、ロマン、アングロ＝サクソンの諸民族と同様、われわれが上に示した意味で人類の社会的将来性の発達のための道具たり得る、とわれわれは信ずる。二つのドイツ系帝国の領内でのドイツ人との、オットマン帝国の領内でのトルコ人とのスラヴ人の衝突において、スラヴ人の側にはその敵の側によりも政治的旧習、ブルジョア的伝統が少なく、現在主権がドイツ人とトルコ人に属しているところで完全に独立したスラヴ諸国家を形成することは人類の社会的理想の実現への一步前進であるとさえ、われわれは信ずる。それ故われわれは、トルコの古びた文化やドイツブルジョア的政治様式の支配に対するスラヴのわれわれの兄弟のすべての闘いに深く共感する。しかしこの闘いにわれわれが共感するのは、よりよき全人類的将来、人格の擁護、思想と良心の自由への志向がそこに現れる限りにおいてである。

民族独立のスローガンと共に、私有財産所有者や資本家の独立に対する社会的闘争、宗教的要素に対

## ラヴリズムの形成

する科学的闘争のスローガンをその旗に書入れている党派だけを、われわれはスラヴ人の中での生命ある党派と認めるであろう。その独立の理想に、正教ないし旧教の死んだ有害な理想、封建制、ないし貴族制の不道德な伝統を繋いでいる民族闘争は、われわれにとっては無意味で遺憾とすべきものである。セルビア、クロアチア、チェヒ、ポーランド、ガリチアの社会的党派は事業においてまた血統においてわれわれの兄弟である。その先駆的サークルにわれわれは喜んでわれわれの雑誌の誌面を提供するであろう。彼等の勝利に拍手を送るであろう。彼等が、彼等だけがその祖国の独立の回復に成功すること、彼等が連邦的ヨーロッパの将来の体制に同権の成員として加わること、をわれわれは期待している。スラヴ問題はわれわれにとって全人類的問題の一部門として意義を有している。ロシアにおけるわれわれの全同志は、この意味でスラヴ問題を自分達の問題とみており、われわれと共に、われわれの出版物の表題に書かれた《前進》がすべてのスラヴ人に対する、社会的再生への、彼等の間での独占に対する労働の、神学的幻想に対する科学の勝利への、呼びかけとして役立つことを、またわれわれの《前進》がスラヴ連邦の綱領になり、将来は、全人類にとってと同様スラヴにとって、《科学と共同体、真理と労働、偶像と独占に対する闘い！》というスローガンに存する、との認識に達したすべてのスラヴ人の機関誌になることを欲するであろう、とわれわれは確信している。

これはロシア人にとって一見最も困難なポーランド問題をも解決する。ポーランド農民の利益をその貴族の利益の上に置く者、自由な共同体のヨーロッパ連邦の理想のために闘う者は、われわれの友で同盟者である。将来の連邦制ヨーロッパにおいては、連邦構成諸国間の境界はほんの僅かの意義しかもたないであろう。もしわれわれ同志達が全ロシアのゼムストヴォでポーランドとロシアの間の問題を語らなければならないとすれば、勿論彼等は、各共同体が自主的に、それまでの全歴史に拘束されることなく、いかなる国家的ないし社会的中心に赴くべきかを決定するよう提案するであろう。共同体の更に一層の専制の下では、民族の差違は、実際の意義をもたずに、生氣のない歴史の伝承に過ぎなくなるであろう。貴族の優越の擁護者と旧教の同盟者はわれわれの敵である。彼等は何よりも先ずポーランド人民の敵であるから。

他種族の諸民族に対するわれわれの関係もこれから帰結される。われわれは、われわれと共に一つの社会的にして政治的な基盤に立つすべての者に味方するであろう。宗教的独断に対して科学の側に、政治的問題の経済的問題への従属の側に、あるいはさらに、より狭い分野では、行政機関の恣意に対して人格の擁護の側に、国家の諸抑圧策に対して思想・言論・結社の自由の側に立つ党派と民族に到るところでわれわれは味方するであろう。われわれはこの分野の外にあるすべての部分的及び地方的問題を、全人類的目的とロシアの利害に無縁なものとして放置しておく。

以上がわれわれの綱領である。われわれは恐らく余分な細部に立入ったが、しかしわれわれはすべての全人類的問題、現在のロシア全体に対するわれわれの態度をはっきり確立することを望んだのである。

かくて今やわれわれと共にわれわれの綱領に共鳴するすべての人に呼びかける——前進！

## Формирование лавризма

—Краткий обзор истории возникновения программы «Вперед!»—

Сигето Торияма

Настоящая статья имеет целью изложить развитие политической точки зрения П. Л. Лаврова приблизительно от 1870г., когда он уехал за границу, до лета 1873г., когда он опубликовал журнал «Вперед», а также разъяснить процесс составления им программы этого журнала «Вперед!»

Для того, чтобы охарактеризовать политическую точку зрения Лаврова перед эмиграцией, нужно принять в соображение тот факт, что он в этот период критически относится к формуле прогресса Н. К. Михайловского, которую по всем правам можно назвать формулой прогресса народников вообще. Что касается до повода для его эмиграции, то ошибается тот, кто буквально верит словам его письма к сыну М. П. Лаврову от 5-го августа 1870г., равно как и тот, кто полностью отрицает значение этого письма как исторического документа.

Переживания Лаврова во время Парижской коммуны 1871 г., так же как и его знакомство с Интернационалом и Марксом, правда, имели немало влияния на развитие политического взгляда Лаврова, но все же нам нельзя преувеличивать эти факторы. Если мы в праве приурочить рождение революционера Лаврова к кому-нибудь определенному периоду, то это должно быть не раньше и не позже как осень 1872 г. При этом решительную роль играл, кроме смерти его возлюбленной А. Н. Чапдицкой, и тот факт, что он в это время узнал о поддержке русской молодежи того времени и надежде, возлагаемой ею на него. Важны также характерное для него чувство призвания и несамостоятельность его образа мыслей.

Касательно того, почему Лавров писал абрисы программы 3 раза (в марте 1872 г., в конце того же года и в марте 1873 г.), а также разницы в содержании этих абрисов, мы должны принять в соображение, кроме обстоятельств, упомянутых позже самим Лавровым, развитие его политической точки зрения в этот период. Именно в этом отношении появившиеся до сих пор исследования оставляют желать многого. Впрочем, при составлении программ, Лавров всегда находился до некоторой степени под влиянием ряда (фактических или мнимых) внешних условий данного времени, что можно сказать и о третьей и последней программе, которую, по его словам, он составил будто исключительно по своей инициативе.

Почвой для возникновения лавризма служило настроение большинства русских студентов, живущих в Цюрихе, которые хотели совместить научное занятие с политической деятельностью. Роспуск этой цюрихской «русской колонии» по декрету русского правительства (1873 г.) так же как и усиление революционного настроения среди молодежи в результате развития движения «В народ» — вот что сделало почву лавризма слабее по сравнению с бакунизмом.